

03

CASE STUDY





まち



わたし

おひとり様 (特に男性)が幸福に暮らせるまちを考える

現場レポート 1

中川寛子

株式会社東京情報堂 代表取締役

2014年3月。週刊東洋経済は「ひとりで生きる ～单身社会のリアル～」と題した特集を組んだ。統計上は昭和の末時点で有業単身世帯が世帯数トップとなっていたものの、まだまだ一般には单身社会到来の意識の無かった時期である。

そこで「男が暮らしやすい町」という記事を書いた。なぜか、爆発的に読まれ、テレビ番組からは中吊大賞なるものをもらった。「孤立化しやすい独身男性は会話が生まれやすい下町に住もう」というのがサブタイトルだった。それから数年。多くのまちで再開発が行われ、個人が経営する商店、飲

食店が減少、均質化が進む現在、まちからは会話が減っている。「孤立化しやすい独身男性」を巡る環境は悪化しているように思われるのだ。

いささか飛躍し過ぎと思われるかもしれないが、最近よくメディアで話題になる孤独死は男性が8割強^{*}。孤独死が孤立死とも言われることを思うと、单身男性が单身女性以上に抱えがちな問題が浮かんでくる。そのためにまちにできることはないか。まちで活動をしている人たちを始め、さまざまな人たちに聞いた。

※ 第3回孤独死現状レポート(2018年3月2日 一般社団法人日本少額短期保険協会孤独死対策委員会)

case 01

单身男性の生きづらさを 結婚相談所の30代男性所長と考える

よすが結婚相談所
立川智也氏



ひとり暮らしの、生活に満足していない男性という言葉にひとつ、浮かんだ考えがある。彼らは結婚したい男性かもしれないということだ。カップル、ファミリーと満足度が上がる背景に妻や子どもなど、深く関わり合う人たちの存在があると考え、結婚はそのための一歩である。

そこで結婚へのサポートをする立場にある人に話を聞いてみることにした。結婚相談所である。話を聞いたよすが結婚相談所は元々は理系の研究者だった立川智也氏が2014年に開業したもので、30代男性（既婚）が所長という業界では珍しい存在。実家を離れて滋賀に赴任していた時、飲み屋でできた知り合いでは孤独を癒してはくれないことを実感、より深い人間関係として結婚を意識し、その結果の開業であるという。

そして、実際、結婚相談に乗り続けて実感したのは趣味嗜好や信念その他個人の選択等を除外、一般論としていえば「人との繋がりが多い人ほど結婚する」ということ。逆にいえば繋がりが少ない人は孤立しがちで、社会性の高い人たちからはその存在が見えないとも。

「30代半ばくらいまではまだ良いものの、世の中の独身男性への目は非常に厳しい。声に出しては言わないものの、各種勉強会、まちでのイベントで单身男性、40代と自己

紹介する人に向けられる目は冷たい。何か問題があるのでは？と思われがちで、見て見ぬふりをされるのです」。

男性かくあるべしの根強い刷り込みが单身男性を排除、見えない存在にしているというのである。

一方の男性側にも男なら社会性が低くても許容されるという意識がある場合も。若いうちなら社会性に欠けた行動を注意する人もいようが、年齢を重ねるにつれ、注意をする人はいなくなる。しかも、現代はWebを通じて主張や趣味だけで人と繋がったように思える時代である。繋がりが格差は年を取ればとるほど本人が思う以上に広がっていくのだ。

それでも結婚相談所を訪れる人はそこでチャンスを掴む。結婚相談所は結婚したい人と二人三脚、お節介を焼き、本人が変革への一歩を踏み出す手伝いをしてくれるからだ。

「お見合いの前に『今日のシャツ、いいですね』『最近頑張ってますね』と一言言うだけで人は変わります。多くの人は普段、褒められることはおろか、ダメ出しさえされていない。深く関わってくれる人がいないのです。ところが幸い、結婚相談所はお節介であればあるほど商売になります」。

昭和の時代にも社会性のない男性はたくさんいたはずだが、その彼らでも40年ほど前にはほとんどが結婚できていた。会社の上司やご近所のおばさんなどがお節介にも相手を紹介していたからだ。

ところが個人情報保護法やセクハラ、パワハラと言われる時代には人はお節介を焼かない。それが婚姻数減少に繋がっているとすると、孤立する人の増加も同根とは思えないだろうか。かつてはお節介を焼かれ、その手助けで社会に溶け込めていた人が、あまり人とは関わらないようにしようという社会になったことで弾きだされているのではないかということである。だ

とするとお節介は結婚相談所以外でも価値として見直されるべきかもしれない。

人は役割を求めているのに まちには役割がない

ところで、結婚したい人と接してきて、また自身の経験も含めてひとつ、立川氏を感じていることがある。人は役割を求めているのではないかというのだ。

社会では人は立場に応じてそれぞれに役割が割り当てられる。舞台での配役と考えると分かりやすいだろう。良い役が付いた人は気持ちよく舞台上に立てるだろうが、人の多い今の時代、役が付かない人も少なくないはず。だが、大小の舞台が多数あれば誰もがどこかで舞台上に立てる。そこで期待され、頼りにされれば役割はやりがいに変わる。

結婚して夫、妻になること、子どもが生まれて父になり、母になることを役割の獲得と考えたらどうだろう。中にはせっかく得た役割を自ら放棄する人もいるが、家庭であれば夫、妻という役割は一人ずつしかない。互いに唯一無二の存在になれるのである。

「寂しかったら猫でも飼えばとはよく聞く言葉。極論ですが、これを飼い主という役割を得ると考えたらどうでしょう。餌を与える、餌を稼いでくることで猫に頼りにされる。だったら頑張ろうと思う。人はそうした、自分が主体的に関わる役割を求めているのだと思います」。



<https://yosuga-kekkono.com>



猫が飼い主を頼りにするかどうかは別問題だと思うが、それぞれに役割がある社会のほうが人が幸せという意見には納得できる。そして、その観点でいうとまちはこれまで役割を無くす方向に動いてきたと立川氏。

「今、町内の清掃は外部の人が仕事としてつまらない思いながらやるものになっていますが、これを町内でやったらきれいになってうれしい、ありがとうと言われて

誇らしいとなるかもしれない。リタイアした植物好きにまちの花壇を任せたら本人にもまちにも楽しい結果になるかもしれない。これからはあえて隙を残し、役割のあるまちを作るほうが人は幸せに生きられるのではないかと思います。

すべてを誰か、見えない人がやってしまうのではなく、住民が関与せざるを得ない、役割があるまち。

この話で思い出したことがある。千葉

市で行われている、まちの不具合を写メで報告するちばレポという仕組みだ。得意なITを利用、簡単に参加でき、反応があるやり方が受けてか、参加者の8割近くが男性、かつ30～50代のこれまであまりまちに関わらないと言われていた層が75%を占めるのだとか。そのうちにはちばレポ以上にまちに関わるようになる人もいるとか。やり方、ツール次第でまだまだまちにはやれることはあるのかもしれない。

case 02 民間図書館からスタートして16年、 まちに知った顔を増やし続けた結果は？

情報ステーション
岡直樹氏(左)
木村圭佑氏(右)



格闘技レフリー・コンパス幼保園
島田裕二氏



チームふなばし88代表
川崎拓己氏



まちでの幸せを知り合いの数で考えるとしたら思い出したのが船橋市の情報ステーションの活動である。

2004年にNPOとなって16年。情報ステーションの岡直樹氏が船橋市で民間図書館を作り始めて以降、私は何度も取材にお邪魔している。最初にお目にかかった時の「100人友達がいたら引っ越さないでしょ」という言葉が印象的だったからである。

始めた当初、大学生だった岡氏は自分が帰ってくる時間に公立図書館が開いていないこと、地元である船橋市が利便性で選ばれ、より便利な場所があるからと捨てられるまちであること、この2つの問題を解決する方途として民間図書館を考案。書籍は寄付で、運営はボランティアを募ってスタートした。

夜遅くまで空いている図書館を作り、ボランティアとして関わり、交流し、人間関係を育むことで利便性を越える魅力のあるまちにしようという意図である。「100人友達が～」という言葉はそこで出てきたもの。選ばれ、選ばれ続けるまちであるための至言だと思った。

同時に、この活動はまちに関わろうとしない、そんなことを考えてもいない人がまちに参加するきっかけにもなるものだった。たとえば、最初はカウンターに本を投げる

ように返却していた中年男性が窓口の人たちに請われ、仕方がないと手伝い始め、ありがとうの言葉を掛けられるうちにすっかり人が変わったように熱心に活動を支援するようになった。

団地の図書館に毎日のように通ってくる、妻を亡くした高齢男性は「自分が来ないと回らないから」と迷惑そうな口ぶりで来館者の子どもと遊んでいたが、それが本心でないことは誰の目にも明らか。その男性に誘われ、これまた「仕方ないな、頼まれたから」と毎日彼に付き合う友人にとっても民間図書館は大きな意味のある場である。

夫を亡くし、広い家に一人で住む女性は多くの人たちが訪れてくれることを楽しみに我が家を改装。民間図書館を作った。できたばかりの図書館を訪れた時の彼女の笑顔は今も忘れられない。ボランティア活動には様々なものがあるが、男女、



<https://www.infosta.org>



年齢を問わず、本は人を動かすツールとして強い力があるように思った。

その後、民間図書館は順調に増え、2020年3月現在では千葉県内を中心に日本全国で104館に。また、岡氏の活動も広がり、5年前からは「船橋人物図鑑」なる、まちに関わる人を紹介する冊子を作るようにも。Webでスタートするメディアが多い中、この媒体は紙で作られ、配布は手渡し以外では行われない。リアルな人間関係がベースになっているのである。

16人が各人1人ずつ、仲間を誘うことでまちに関わる人を増やそうとスタート、第一号には32人が掲載されたが、それが徐々に増え、2019年11月に発刊した4号には99人が掲載されている。まちに関わっているだけが要件なので、地元の農家、お米屋さんからIT企業、アーティストに美容師、ケアマネジャー、公務員などと実に様々な業種の人々が掲載されている。その結果だろう、船橋では民間の人たちが立ち上げた、他にはないようなイベントが多数あり、普段はあまりまちに関わりたがらないひとり暮らしや男性にも参加しやすいものが少なくない。

たとえば、格闘技レフリーから保育園事業を立ち上げたという異色の経歴を持つ島田裕二氏は肉×格闘×ご当地キャラの祭典「ミートフェスタ&ボンバイエ」なるイベントを年に1回開いている。ファミリー

の多いまちではあるが、肉、格闘技となれば男性も顔を出しやすい。

「一度顔なじみになれば一人でも店に顔を出しやすくなりますからね」と島田氏。

船橋競馬場を利用したダートランニングフェスタも珍しいイベントだろう。通常は馬が走る、9cmもの厚さの砂が敷かれたコースを人間が走るというもので、ふかふかの砂が力を吸収してしまい、思うように走れないのが挑戦する意欲を掻き立てるといふ。2011年に参加者400人弱の大赤字でスタートしたものの、現在では1000人を超す人が参加。ボランティアも100人近いという。

「チームでも、一人でも参加できるため、最近では30～40代男性の参加も目立つようになってきました。人と繋がりたいと思っている人は多い気がしますが、誘ってもらうのを待つのはどうなんですかね。それでも来てもらいたいの、騙されたと思って来てみてよ、楽しいよ～と声をかけるようにしています」とは地元の五つ星お米マイスター・牧野基明氏とともに運営に当たる川崎拓己氏。2019年は前述のミートフェスタと共催する予定で盛り上がっていたものの、残念ながら天候の影響で中止。周辺からは続けて欲しいとの声が多く、すっかり楽しみにされている。

若い人のうちには地元でボランティア活動をすることが就活で有利に働くのではないかという不純(?)な動機から参加、そこではまって活動に参加し続ける人もいる。岡氏からバトンタッチを受け、現在、情報ステーションの代表を務めている木村圭佑氏はそんな一人。生まれてからずっと船橋在住ではあったものの、愛着なくきたそうだが、活動に出会ってすっかり地元が好きになったという。

人口64万人でまだまだ増加傾向にある船橋市にあって僕らの活動は微々たるものと岡氏は言うが、それでも16年前から比べるとまちには知った顔が増えている。同様に感じているボランティア参加者、船橋人物図鑑掲載者も多いはずで、面白そうなイベントも多数。少なくとも他のまちよりは人と仲良くなれるチャンスが多いまちとは言える気がする。



2019年11月に行われた船橋人物図鑑4号目の発刊記念イベントでの記念撮影風景

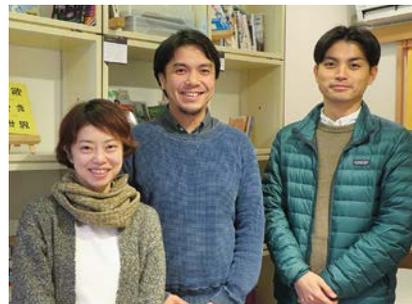
case 03 本を入口に好きなことができる場を。 小さなまちでみんなで運営

国立本店
加藤健介氏
吉川真央氏
下田裕加和氏

まちに関わるきっかけにはいろいろあるが、本はそのうちでも力のあるツールらしい。前述の情報ステーション以外にも本を媒介にした活動が目立つのだ。

そのうちのひとつ、国立本店は本を入口にはしているものの、実際の活動は非常に幅が広く、それぞれ好きなことを仲間と一緒にやっているというのが正しい。

運営は年に1回募集される「ほんともち編集部」メンバー約30人ほどで行われており、活動はメンバーの興味関心で変わる。ベーシックな活動としては国立本店の選書、店番、企画運営があるが、それ以外には



左から下田氏、加藤氏、吉川氏。取材している間にもメンバーが多数訪れていた



<http://kunitachihonten.info>

周辺の施設や店舗とコラボしてのイベントがあったり、フリーペーパーや地図を企画制作したり、建物の保存活動に関わったりとほぼなんでもあり。メンバーになって知り合った同士で、新たな活動を始めるとケースも多々ある。

面白いのはメンバーになるのは会費(社会人だと月額4000円)を払う必要があること。普通、書店の店番はお金を払ってもらえるのだが、ここでは自分でお金を払って店番をやるのである。

だが、書店でアルバイトをするのと違い、国立本店は人と会う場。会費を払っているからといって何かをしてもらえないわけではないが、自ら前に出て行けばできることが増える場なのである。

就職を機に上京してきた吉川真央氏は国立が営業エリアだった。仕事に見かけて気になっていた時にたまたま読んでいた本に国立本店が登場。それがきっかけとなって訪問、メンバーに加わった。大学時代から本を物々交換する場を作り、現在は出版社勤務と元々本が好きだった吉川氏だが、初訪問には多少の勇気がいった。

「東京には知り合いが少なく、自分から何かアクションを起こさないと会社と家の往復になってしまうなと思いました。それは嫌だし、一人の心細さもあった。でも、酒を飲んで憂さを晴らすタイプではありません。だとして世界を広くしたいと考えました」。

訪れた国立本店は人が温かく、フレンドリーだった。もう一人、取材に応じてくだ

さった下田裕加和氏も「イベント開催時に通りかかったら、声をかけられたのが参加のきっかけ」とのこと。誰に対してもウェルカムな雰囲気がある場だから人が集まるのだろう。

国立には国立本店以外にも人が集まり、それぞれに独自の活動をしている場が数多くある。

「近くには国立本店と姉妹店のような、住まないシェアハウス・国立五天があり、まちの茶の間・コトナハウス、一人出版社の小鳥書房、みんなで作るひみつ基地・くにきたベース、富士見台団地で活躍する大学生たちもいれば、同団地にはシェア商店も誕生していますし、それ以外にもいろいろな活動があります。国立本店は10代～60代と幅の広いメンバーがいますが、中心となって活躍しているのは30～40代。外から見ると国立のイメージよりも若い人が多いまちです」と加藤健介氏。その中には吉川氏のように地方から出てきた単身者も多く、繋がりたいという思いが強いまちなのかもしれない。

そうした活動が多い背景にはまちの包容力がある。お堅いことを言う年配者がいないわけではないものの、近隣の歴史あるまちに比べれば若いまちでもあり、それほどごりごり言われるわけではないとか。市民の自治力が高いとも、若い人に無関心とも、言い方はいろいろあり得るが、若い人の活動に寛容であるのは事実だ。

また、まちのサイズもポイントと吉川氏。国立は住宅地が大半で、人が集まるポイントは比較的限られている。その分、人に会いやすいのである。

そうした居心地の良さが評価されてか、国立本店などに関わった結果、国立周辺に引っ越して来る人もいる。

室長の加藤氏もその一人。関わってみることで知り合いが増え、まちの良さが分かり、そこに暮らしたくなって引っ越し。羨ましいほど楽しそうな循環である。

だが、それもこれも吉川氏ではないが、一歩踏み出すところから。

「関わりたい層は多いと思っています。国分寺で行われたこくぶんじカレッジという地域で何かをやりたい人向けの学びの場に関わったことがあるのですが、そこには若い人、男性も多く、中心は30～40代。ただ、きっかけがないという声が多く、それを作っていく、通りかかった人にも声をかける。そんなことをやっていきたいですね」。

ひとつ、新しい動きを加えておこう。国立本店には大人だけではなく、10代も集まり始めている。中学1年生から高校3年生までの10人ほどがコアメンバーでそれ以外にイベントごとに顔を出す人たちも。月に1回、放課後の道草と称して行く場所がない、遊び場がないという不満から始まり、今ではいろいろな人生の選択肢を知りたいと活動が広がっているという。

「引きこもってしまうのは他に道があることを知らないから。家と会社、家と学校以外に生き方にもまちにもいろいろあることを知る、行って比べてみると選択肢も見えてくる。選択肢があれば動ける人もいるはず」と加藤氏は活動を応援する。若いうちから選択肢を知るために動いていれば、その後の世界も閉じたものにはならないはず。私も応援したい。



「国立本店」とのみ書かれた店頭。説明もなく、知らなければ謎の場所

case 04

安価、安全な入居者専用食堂で ゼロから1の人間関係を作る不動産会社

東郊住宅社
池田 峰氏



人を繋ぐものとしては食も大きな存在である。まち、食、不動産というキーワードで思いついたのが入居者専用食堂・トーコーキッチンである。

初めてのひとり暮らしはする本人にとっても、させる親にとっても不安が大きい。その不安の一部を取り除いてくれると多くの親たちから期待を寄せられている不動産会社がある。JR横浜線淵野辺駅近くにある東郊住宅社である。

1976年創業で1984年から賃貸管理をしてきた同社は2004年から礼金、敷金ゼロに加え、退出時の修繕義務なしと早くから最先端の経営をしてきた会社で、2015年12月27日にスタートしたトーコーキッチンもいまだにほとんど追従のない、先駆的な試みである。

キッチンという名称からも分かる通り、食堂である。しかも、入居者専用。自室の鍵が食堂の鍵ともなっているのである。朝食100円、ランチ・夕食500円という破格値の日替わりメニューは業務用品を使わない手作りで、地元産の野菜、米など材料にこだわった安全な食が提供される。

この他にない仕組みが受け、トーコーキッチン、淵野辺の人気は急上昇。近隣にある青山学院大学、麻布大学などの大学はもちろん、都内、神奈川県内にある学校へ進学予定の学生からも問い合わせが

あるほどで、最近では淵野辺周辺に物件を取得、東郊住宅社に管理してもらいたいという投資家もいるという。

ひとり暮らしの不安のひとつ、食、健康をサポートしてくれる体制が人気であるのは間違いないのだが、実際に現場を訪れてみると、食は単なる入口であることが分かる。食べ盛りの学生からすると2人前、3人前食べてもファストフードより安い朝食はもちろん魅力だが、それ以上にひっきりなしに「美味しい?」と聞き、挨拶する池田峰氏の存在が大きいように感じられるのだ。実際、入居を決める人は親子でトーコーキッチンを訪れ、池田氏とのやりとりを経て決断をしている。食だけで選ばれているわけではないのだ。

若い頃に海外に住み、一人旅も多く経験してきた池田氏は知らない土地でかけられる挨拶には特別な意味があるという。

「ここに住んでいいと認められたような気持ちになるのです。一人で旅している時には宿の近くに行きつけを作り、そこでの関係がアジアから来た知らない男から挨拶する間柄に変わり、やがてミネ!になる過程を実感しました。そうしていくうちに全く知らないはずだった土地が身近になり、二次元が三次元になります。私が旅で得た経験を身近でもらえたら。トーコーキッチンにはそんな思いもあります。そして挨拶の手段として食はハードルが低い。『最近、どうしている?』は答えにくいけれど、『美味しい?』なら答えはシンプル。人によってパーソナルスペースの取り方はさまざま、あまり踏み込んでほしくない人もいますが、それを計るのにも食は便利。水を配りながら『味、どう?』と聞く。それで関係はゼロから1になります。人間関係はゼロから1が一番大変で、1から100はその人次第。まずは1にすることです」。

そのためにトーコーキッチンには食券機

がなく、番号札が動物のフィギュアになっているなど利用者がスタッフと接触する細かい配慮がある。食堂を始める時、周囲からは大手が定食チェーンと組んで似たような仕組みを作ったら?と聞かれたそうだが、形だけを真似てもトーコーキッチンは生まれない。安さ、食だけが売りではないのだ。

といってコミュニティを作ろうとはしていない。コミュニケーションを重ねているだけと池田氏。コミュニティを作ろうと考えると、結果、誰かを弾くことになる。それよりも誰にとっても心地よい日常、ほど



https://www.fuchinobe-chintai.jp/toko_kitchen.html



退居予定だったレストランを改装、料理人をそのまま雇用して始めた



冷凍食品などを使わず、安価でも安全、安心な食を心がけているという



良い関係を日々重ねることが大事なのだ。そのため、非日常であるイベントが開催されることもない。

場としての印象は異なるが、たとえば言えばスナックのようなものだという。

「家の近くであって、匿名でいて良い場所。互いにどこの誰かは知らないけれど扉を開けると『お帰り』と言ってもらえ、あなたが誰であってもそこにいていいんだよと無言で言ってくれる場所。もし、嫌われたら他の場所に行けば良い、束縛もされない。無条件で認めてくれるという意味では他人なのに、家族に近い存在でもある。トーコーキッチンはその場だと思っています」。

最近では学生だけではなく、ひとり暮らしの親を住ませたい、同社経由で家を買ったら利用させてもらえますかなど、若い賃貸層以外からの問い合わせも増えるようで、特に高齢者、その子どもからの問い合わせが目立つとか。

これだけ本業にも成果が出ているなら他の不動産会社がなぜ真似しないかが本当に不思議だが「たいていのビジネスはゼロから1ではなく、1から利益を確保した上で始めようとするから」というのが池田氏の答え。「トーコーキッチンのパッケージ商品があったらやってくださる人が出るかもしれませんね」とも。

広告業出身でビジネスはゼロから1を作

るものとする池田氏と1からしか始められない人では発想が違う。だが、ひとり暮らしの孤独のように不動産業にはまだまだ解決すべき、解決がビジネスに繋がり得る負がある。発想を変えるチャレンジくらいはしてみても良さそうである。



外から内部の様子が見えるつくりになっているため、道行く人が覗いていく

CASE 05 大人のサードプレイス？ 今、スナックが求められている理由

スナック ニューショーイン 山本 遼氏



トーコーキッチンの取材でスナックという言葉が出てきた。かつてはどこの駅前にもあった昭和生まれの夜のオアシス「スナック」だが、近年コミュニケーションの場として新たな価値を見いだす動きがある。元々が気軽に行ける遊びの場であるスナックならば男性にも行きやすいのではないか。それにそもそもスナック人気再燃の背景には何があるのか。令和生まれのスナックニューショーインで聞いた。

クラウドファンディングを経てスナックニューショーイン（以下、ショーイン）を開いた山本遼氏は65歳以上を対象に賃貸

仲介をするR65不動産などを手掛ける不動産事業者。10カ所100室以上のシェアハウスを運営してもおり、自身も三軒茶屋にある15室に26人が住むモテアマス三軒茶屋を中心に居住している。ここは居住者同士が仲が良く、イベント多数、楽しい場所である。

だが、どんなに楽しい場所でもひとつの場に依存し過ぎると辛くなると山本氏。ひとり暮らしの住まいと違い、シェアハウスには他の入居者と過ごすリビング、個室があり、2つの空間で暮らしている。それでも、内向きのエネルギーが強過ぎると、もうひとつの新しい出会いの場が必要と作ったのがショーイン。友達が友達を呼びやすい空間を作ろうと思ったのだという。

なぜ、スナックか。自身が上司と2人、知る人のいない東京に支店を作るために上京、愚痴も言えない状況で辛い思いをしていた山本氏を救ってくれたのがカウンターで鉄板を挟んで向かい合う焼肉屋だったからだ。

「目の前で焼いてくれる店で、焼けるまでに時間があるから、そこでぼつぼつと話

をする。僕にとって幸せ度がアップするのは人間関係、利害関係なく悩みを話せる場があること。言っちゃダメ、言えない状況で問題を一人で抱え込むのは不幸だと思います」。

スナックであればカウンターを挟み、他に客がいたとしてもママとは1対1で対面する。ママは客が投げたボールを必ず打ち返してくれるし、なんだったら同じ球をお隣さんにも返す。隣との距離の近いカウンターで同じ球を受けた同士、それをきっかけに会話が弾むのもよくある話。つまり、スナックとは会話をさばき、会話を繋ぐ人が仕切る、話す気になれば必ず誰かと会話できる場なのである。

そう考えるとスナックに関心を持つ人が増える理由が分かる。誰しも初対面で見知らぬ人と会話をする場面では緊張するし、相手にしてもらえなかったらと不安に思う。誰かを誘う場面でもそうだろう。そして何度か誘い損ね、声をかけ損ねたことから人付き合いに苦手意識を持つようになる人もいるのではなかろうか。だが、スナックであれば、一応客として飲みに来

ているという立場もあり、投げた球を無視されることはないのだ。

客としてではなく、ママとしてスナックに関わりたという人がいるのも同じよう



元々もスナックだった店内。カウンター内には今日のママ2人が



全体としては昔ながらの店内だが、所々にポップなインテリアが

な理由からだろう。ショーインではママは日替わりで開業前にやりたい人を募集した。本業で会う人とは違う人に会いたいと20人が応募、そのうちの7人が現在、ママとしてカウンターに立つ。

取材にお邪魔した夜は演劇ユニット水と火のふじわらさん、さとうさんが担当の日で店名も「みずとひ」。お二人はスナックは舞台に似ているという。窓の少ない閉じた空間で世界を共有しやすいとも。そう言えば、互いを愛称で呼び、相手を詮索せず、ある意味、その場での役割を互いに演じているという意味でもスナックは演劇的である。長年通っていても田中部長ではなく、たーさん。違う人を演じていると言っても良い。それが本業だけでは煮詰まることのある現代に救いをもたらしているのかもしれない。

そう思いながら会話を聞いていたら、ウーロン茶を飲んでいた高校生のたまちゃん(仮名)が口を挟んだ。「それでも大人



取材当日のママ2人。ママという役割があると話しかけやすいのかもしれない

はいよね、好きなのところに行けて。高校生なんか学校と家だけ。死にたくもなるよね」と。嫌になっても出て行けない場所しかないのはつらい。

「行くも行かないも自由で、でも行きたいと思える場所が欲しいよね」。

そんな場所があるまちならひとり暮らしに、男に限らず、多くの人が幸せになれるかもしれない。だが、ショーインのように新たに誕生するスナックは極めて少なく、経営者の高齢化などから全国的に減少傾向。新たな意味を踏まえて令和の時代にあったスナック誕生を妄想したい。

case 06 公と私の間、中間領域での対等な関係が住む人を幸せにする

松陰会館
佐藤芳秋氏



令和に生まれたスナック、ニューショーインが立地する東急世田谷線松陰神社前は近年若い人を惹きつけるまちのひとつ。きっとそこには何か、住んで楽しい部分があるはず。地元の不動産会社、松陰会館を訪ねた。

都心に出るためには乗り換えが必要で、決して便利とは言えない東急世田谷線沿線だが、松陰神社前駅を筆頭に住みたい、行ってみたい店があるとここ数年以上、人気が続いている。いくつか要因があるがそのひとつが単身者や男性にもまち、人に関わるチャンスが多数あることだと地元密着で不動産業などを営む松陰会館の佐藤芳秋氏。

「祭りや商店街のイベントを公とし、各個店を私だとすると、その中間にある個店ベースの、店主催のサッカー大会や畑の活動、展示会などが多数開かれており、関わるチャンスが多いのです。加えて店主と客が対等という意識があり、店主が客に困りごとを相談、客が店のメニューをデザインするなどという関係が生まれていま

す。昔だったら、そこに費用が発生したのかもしれませんが、今は関わられてうれしい、感謝されて良かったと感じ、それが自分自身のまちでの存在価値に繋がっているのではないかと思います」。

松陰神社前ではまちへの入り口は個店だ。ネットで美味しい店情報を探して来



<https://shoinkaikan.com>



左:世田谷線沿線は乗り換えが不便とあまり開発が進んでこなかったエリアのひとつ
右:街中で行われるイベントの告知。大小さまざまなイベント、集まりがあるという



店、何度か顔を出しているうちに声をかけられるようになって互いに顔が見える関係になる。そこでさらに声をかけられ店のイベントに参加。やがて、まちのイベントにも出るようにと、個店を通じて住む人とまちが繋がっていくのだという。これなら能動的にまちに関わろうとしていなかった人でも自然に関わるようになり、顔見知りが増えていくはず。住んで楽しいまちとを感じる人も増えるだろう。

これができるのは個店中心のまちだからだ。大きな組織では個人情報保護法やコンプライアンスなどを遵守するために、店は客に必要以上に近づかないし、特定の個人に声をかけることもない。だが、松陰神社前の個店はそんな、今の時代とは真逆な行動を取る。店の主人が客と繋がり、客に他の客を紹介したりするのである。小さな店の、個人だから育まれた信頼関係が新たな人間関係を生んでいるのである。

松陰神社前に個店が集まっているのは冒頭で述べたようにちょっと不便であることに加え、道路などの制約からまちの規模がコンパクトで、小規模な建物が多いことが理由。不便である分、建物が小さい分、賃料がさほど高くないので個人事業主でも店が構えやすいのである。逆に大きな建物がないため、大型店やチェーン店は入ってきにくい。

この規模感が店を開く人だけでなく、住む人をも惹きつけている。

「東京は人が多すぎて消耗、疲れたという人が個人が見える規模の松陰神社前を始めとする世田谷区、大田区などに住み替えているように思います」。

まちの特徴、個性が選ばれる要因となっているわけだが、佐藤氏はそこに甘んじてはいけないという。人口減少下、あと10年もしたら選ばれるまち、そうでないまちが峻別されるようになるのではないかとこののである。

その時にも選ばれるためには地域が面白くなくてはダメ。「面白い個店、入居者をまちにキャスティングするのが不動産会社の役目。その人を入れるために大家を口説く、入居しやすい貸し方、シェアのやり方を考える、ニーズとちゃんと捉えるなど不動産会社にできることはたくさんあるはずだ」。

また、今後、デジタルネイティブが増えてきた時にはまちの意味、選ばれるための要因も大きく変わってくるはずだという。

「かつて多くの商店街は田舎から東京に出てきた人で構成されていて、ある意味、都市と田舎の間の中間領域でした。人間関係を繋ぐ意味でも中間領域

だったと思います。ところが、それが徐々に無くなり、まちが変容。今後、スマホとネットで買い物をする人が増えてくると商店街や個店といった中間領域に魅力を感じる人が少なくなってくるかもしれない。その時に何をプラスすればまちに魅力を感じてくれるかを考えています」。

答えのヒントはクラウドファンディングの隆盛にあるという。人は誰かのために何かをやることに幸せを感じる。共感したい、役に立ちたいと思い、それを幸せだと感じる。だとしたら、まちにも役割があれば住む人は幸せを感じられるのではないだろうか。

「地主、大家なら役割を与えられます。居住者に住宅の掃除や植栽の手入れをしてもらえばやりがい、感謝が生まれるでしょうし、運営する複合施設松陰プラットでは掃除をしてもらうことで家賃を下げる仕組みを導入するなど、やり方はいろいろ。一緒にやる大家、応援したくなる大家などそれぞれに自分のキャラクターを設定、住む人などを巻きこんでいくと良いのではないだろうか」。

これまでまちの中で見えない存在だった地主、大家そして不動産会社がまちの将来、住む人の幸せへの鍵を握っていると考えると、その責任、重大である。



人気があると言われる松陰神社前だが、世代交替できずに閉まる店もある

case 07

不動産会社はまちの入り口、 人材も仲介するワクワク広報室の仕事

エヌアセット ワクワク広報室
松田志暢氏



不動産会社の役割について、もう1社、松陰神社前同様、近年まちを盛り上げる動きが増えている溝の口で聞いた。

初めてのまちで住まい探しをする時、入り口となるのは不動産会社である。そこで美味しい店の情報、まちの遊び場など地元へ溶け込むための手助けがあれば、まちの見え方は変わってくるはずだが、そこまで考えて仕事をしている不動産会社はさほどはない。

その稀有な会社のひとつが川崎市高津区にあるエヌアセットである。東急田園都市線溝の口駅南口から歩いて1分ほどの場所にある同社ではワクワク広報室という不思議な名称の窓口を作り、まちの広報活動を行っているのである。

担当者の松田志暢氏は高崎経済大学地域政策学部地域づくり学科出身。行政、民間、NPOといったまちづくりの様々なプレイヤー同様に不動産会社もその一翼を担うべき存在ではないかと考えていたと



<https://www.n-asset.com>

ころに、コミュニティデザイナーに関心を持つエヌアセットの経営者である宮川恒雄氏と出会い、それが縁で入社することに。仲介、賃貸管理の現場経験を積んだ後、社長直属のワクワク広報室が発足、まちの広報担当として仕事をすることになった。

具体的な活動は多岐にわたる。単身者の参加が多いのはフェイスブックグループ「ふらっと溝の口」。SNSは男性と親和性が高いのか、スポット情報を挙げてくれるのは男性が多いとか。同グループのメンバー1000人突破を記念して始めた「ふらっと1000BERO」は1000円の飲食セットを地元飲食店に用意してもらい、自由に参加してもらうもので、当初5店舗で始め、2019年10月の6回目では12店舗まで成長。単身ばかりではないものの、地元の人たちに支持されるイベントになった。

若い人が多い1000BEROに対抗して高額帯のイベントのくち飯も地元不動産オーナーの越水氏と協働で開催。40～50代の男性を集めてもいる。

そのほか、月に1度周囲の清掃を行うグリーンバード溝の口を開催したり、管理で関わる大家さんに農家が多いことから、その野菜を店頭で直売、子ども向けのイベントを開催するなどの活動も。ただし、これらについては単身者の参加はそれほど多くはない。松田氏も単身、特に男性を意識したことはないという。

「2年ほど前までは溝の口にちなんで、ビールを飲むので麦ノクチ、お好み焼きなど粉モノを食べるので粉ノクチなどといったイベントや25歳以下飲みなど単発的なことをやっていたのですが、2017年12月に築90年ほどの建物を利用、地元の大家さんなどと組んで始めたシェアオフィス・ノクチカの運営に携わることになり、このと



左はシェアマーケット・ノクチカ。シェアすることで安価に小さいながらも店が持てる場。右はシェアオフィス、ノクチカ



ころ休止中。25歳以下飲みなどでは会社と家以外の場が欲しいと入居者を含め、若い人たちが多かったのですが。現在は部屋を探している人を案内する途中でノクチカやそこから派生して生まれたシェアマーケット・ノクチカを連れ回したり、グリーンバードや誰でも参加できる場などの紹介をする程度です。

でも、と松田氏。新卒など若い人たちからは「まちと関わる必要がない、外に出かける用事がない」と聞くという。家にいても遊べることはあって時間は無限に潰せるし、食事も含め欲しいモノは部屋に届けてもらえば良い。まちにわざわざ出かけるほどの魅力はないと考える単身社会人が多いのである。「とすると今後は単身者、男性を少し意識したほうが良いのかもしれないと思います」。

ちなみに松田氏が今注力しているのは前述のノクチカやこれまで培ってきた人間関係などから生まれる場と人のマッチング。この2年ほどで60件以上の協業を生み、新しいチャレンジを応援してきたという。不動産仲介ならぬ人材仲介を行ってきたわけで、これからの不動産業の在り方としては非常に面白いと思うのだが、これができるのはやりたいことがある人、まちに出てきて人に会おうとする人に対するのみ。まちに出てくると遊ぶ以上に面白いことがあるわけだが、出てこない人にはそれは伝わらない。難しいところで、松田氏には今後、そこまで範囲を広げて取り組んでほしい。



CASE 08

地域社会と祭りの変容。 御輿を担いでいるのは誰？

お祭り評論家
山本哲也氏



本、食とまちと人を繋ぐ媒介について考えてきた。ところで、地域で男性中心のイベントといえば祭りがある。近年は減りつつあるが、女人禁制の祭りも多くあったことを考えると祭りの世界は男性社会といえよう。だとしたら、祭りに参加することで地域に関与していく手はなかるうか。お祭り評論家・山本哲也氏に聞いた。

結論から言えば、そのまちに住んでいても、地域で信頼されている人からの紹介でもない限り、御輿はそうそう簡単には担げない。

「岸和田のだんじり祭や博多祇園山笠のように全国的に有名な祭りでも近年は外人部隊が増えています、地元の方々か

らの紹介がなければ入れない世界。私は4年前から神田祭りに参加させていただいていますが、祭り半纏の管理は非常に厳しく、すべて番号入り。連帯責任の世界なので、知らない人が参加、トラブルが発生するリスクは避けたいのです」。

そのため、小さなまちの、人手が減って祭りが開催できるかどうか危ぶまれる場合でも担ぎ手募集を地元を含め、不特定多数に呼びかけることはほとんどない。幸い、最近は担ぐのが好きな御輿愛好会などといった体育会系の、ルールを厳守してくれる愛好家団体があり、場所によってはそうした人達が担ぎに来てくれる。地域社会に貢献する人の減少を地元に住んではいるものの、信用できない新参者ではなく、しっかり訓練された外人部隊でしているというわけである。

だが、その状態のままでは将来、祭りはどうなるのだろうという懸念もある。最近では人気の祭りでも、上下関係の厳しさ、準備のための拘束時間の長さなどから子どもの方は参加するものの、高校生以降参加する人が減る例もあるとか。

一方で青森のねぶたや徳島の阿波踊りのように誰でも参加できる祭りもある。



<https://www.yamamototetsuya.com>

「サテライトオフィス誘致で有名な徳島県美波町には海岸を練り歩いた「ちょうさ」(太鼓屋台)が海に入る勇壮な日和佐八幡神社の祭りがありますが、まちでは住んでいる人に積極的に参加を呼び掛けているようで、地元が外から来る人達をどう活用していくかは今後の祭り存続のためのポイントかもしれませんね」。

ここまで読んで、祭りとまちは似ている!と思った人もいよう。実際、2016年11月に立ち上がった一般社団法人マツリズムは祭りや地域文化への関わり方が分からない若者や外国人と地域の祭りをマッチング、「祭りの力で、人と町を元気に」を掲げて活動をしている。祭りはまちの縮図なのである。

当然、入りやすいまち(≒祭り)もあれば、そうでないところも。入りやすくすればまちも、殿方も救われると思うが、神事でもあり、それは簡単に改革できないという声もある。それが故に祭りがまちもろともに無くなるのを良しとするか、否か。まちの人たちの考え次第である。

CASE 09

大人になって友人ができる! という幸せを生む場所

C/NE(シーネ)
上田太一氏

本、食と並んで人を繋ぐ媒介として頭に浮かんだのが映画。近年、映画館以外で映画を楽しめる場が増えているのである。

2019年2月。東急東横線学芸大学駅からすぐの住宅街、路地の奥に「路地裏の

文化会館」をコンセプトにしたC/NE(シーネ)という場が生まれた。映画と食を2本柱としており、平日は食堂として、週末には映画を上映したり、食絡みのイベント開催、レンタルスペースなどとして使われている。

ここ1~2年、藤沢市の鵜沼海岸駅前の商店街にある、元写真館を利用した映画



建築関係の友人たちと一緒に運営に当たる上田氏。異なる業種が共同で起業も今風だ



<https://welcomecine.com>



手を入れ過ぎないように作ったという点内。左にカウンター、キッチンがある



路地裏という通り、突き当たりの手前に立地、周囲とは異なる色合いで目立っている

と本とパンの店「シネコヤ」、昭和の短期労働者が多く居住するまち山谷の映画喫茶「泪橋ホール」など映画を媒介にした場が相次ぎ誕生している。映画の力が見直されているようなのだが、そのうちでもC/NEは他のまちに比べ、周囲に若い単身者が居住していそうだ。

実際、単身者かどうかまでが全て分かるわけではないものの、来館者は30～40代が中心でご近所に居住している人たち。

「大手企業に勤める会社員、フリーランス、立場はそれぞれですが、もうひとつ、自分の軸を持ちたい、個人として社会と関わる活動をやろう、やりたいという人が多いようです」と館長の上田太一氏。

上田氏は元々テレビ関係の仕事をして

おり、目に見えない何万人かを相手に番組を製作していた。ところが、その後場作りを行う会社に転職、さらに友人たちとイベントをやるようになり、リアルな場での人の反応に心を惹かれるようになった。意図するものが伝わった時の快感、それが人に波及し、返って来たり、予期せぬプランニングに伝わる面白さ。

そのため、一緒にそうしたイベントをやってきた友人たちと会社を立ち上げた時から、いつか自分たちの場を持ち、何かを始める人の背中を押すような活動をしたと考えてきたという。いくつかを転々とした後で見つかったのが現在の路地裏の建物。以前はラム肉とパクチーが売りのレストランだったそうで、厨房はそのままに、それ以外もできるところは自分たちで手を入れ、ただし、入れ過ぎないようにして作り上げた。

「ホリエモンが言うようなテンション高い起業はなかなか難しいし、何も全員が起業する必要もない。でも会社の仕事以外でやりたいこと、好きなことがあるならそれを仕事以外として続けてもいいんじゃないかと思っています。家でも会社でもない場所として、ただ落ち着けるだけのサイドプレイスではなく、何かを始めたい人を後押しする場としてここが機能してくれたらと思っています」。

何かを始め、やり続けていると仲間が増え、まちの中に友人関係が生まれ、まち全体が面白くなる。上田氏はそうした関係が生まれる場としてC/NEを考えているのである。

「東京では住んでいる場所は単に最寄りの駅というだけで多くの人はそこに愛着を持っているわけでも、友達がいるわけでもない。だからでしょう、特に男性は会社と家との往復になりがちで表情がひ

とつしかない。人生が会社にすっぽり入ってしまう。でも、何かを始めれば友達ができるし、大人になってから友人ができるのは本当に幸せなことだと思う。ただ、それは受け身で待っているだけではダメ。重い腰を上げてもらおうと、C/NEではいろいろな面白がってもらえそうなテーマでイベントなどを開いています」。

ビール、焼売、カレーなど食、しかも男性受けを意識したようなイベントも多く、少しずつ人は集まり始めている。引越してきたばかりの単身者が他の人と仲良くなる場面も見かけるようになってきた。

「祐天寺から学芸大学にかけては大きな開発が行われておらず、路地もあり、普通の暮らしが営まれている。一方で30代のカメラマンやデザイナー、料理人、ファッション関係などクリエイティブな人たちも多く、この人たちが横に繋がっていったら、もっとまちが面白くなるかもしれないという気がします。そのため、2020年には2階にライブラリー、サロンを作り、メンバーシップ制でもっと繋がれる仕組みを考えています。ここが個々の活動の拠点となったら面白いな」と。

そのためにはまず自分たちが楽しく、来る人が楽しめるような企てで場を盛り上げていきたいと上田氏。それを糸口に自ら楽しいことを取りに行くような人が増えればまちは楽しく、人は幸せになるのかもしれない。



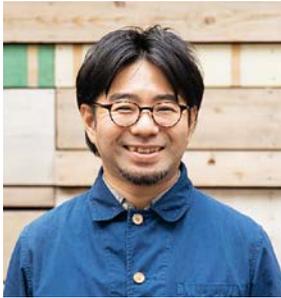
会話の糸口になるようにとあえて珍しいクラフトビールなどを揃えているという



case 10

「また会ったね」の一言が変える まちの見え方

面白い会 唐品知浩氏



まちと人、人と人の関係を考える時、繋がりの濃淡もテーマのひとつではないかと思う。既存のまちにある組織、たとえば町会やPTAに拒否感を抱き、敬遠する人がいること、それがあるがためにまちと関わりたくないと思う人がいるからだ。

まちや世の中の出来事をテーマにその課題を話し合う集まり、面白い会を主催する唐品知浩氏。まちが好きだったわけでも、愛していたわけでもないが、住んでいるうちに粗が見えてきて、そのまちで育つ子どものために、より楽しく住むためにと始めた活動が面白い会のベースだという。続けているうちに駅前を知っている顔に会う頻度が増え、それがまちへの思い入れに繋がっていった経験から、それを広めていこうと各地で開催されるようになった。

よくまちの課題解決のためにと開かれ

る「◎◎問題を考える会」がいかにも真面目で何かしらの結論なり、提言なりを出さなくてはいけないような圧力を感じさせるのに対し、面白い会は無責任に言い放して良く、参加への心理的なハードルはかなり低い。だからだろう、他の「考える会」が参加者多数で盛り上がる風景はあまり見ないが、面白い会ではあつという間に定員一杯になることもよくある。

さらにそのハードルを下げようと新宿区笹塚駅近くで2019年の8月から開かれているのが笹塚を面白いバーだ。京王不動産が駅近くに保有している宿泊施設内に設けられた無料の地域交流ラウンジを利用、月に1度開かれており、毎回、40～50人が集まっている。

「電源、Wi-Fi、飲み物の販売はあるがあまり活用されていなかった場所をテーマに、面白い会でアイデア出しをしたら、まちに気軽に出会える場所がほしいというアイデアが出て、実際にすぐにバーを始めることにしました。地元で活動している人をゲストバーテンダーとして立てていますが、特に何かをしてもらうわけではなく、それを行く理由、口実にしてもらっているという感じでしょうか。交流したいなんてダサくて言えないけれど、あの人に関心があるから行ったなら、そうは見えませんかね。人が動くには言い訳が必要だと思っています」。

地元の商店街・町会関係者や議員、学生、働いている人から住んでいる人まで様々な人が集まってきており、いつもの生活の中では知り合えない人と知り合える場となっている。

といっても話のきっかけとして「どんなお仕事をしていらっしゃるんですか?」といった質問をすることはあっても、それが名刺交換に繋がらないのが特徴だという。さらりと軽く顔見知りにはなるけれども、それ以上にぐりぐりと相手の情報を求めることはないのだ。

「毎月来ている単身者もおり、ここは身元を詳しく明かさずに気軽に人と繋がれる場所。『また会ったね』くらいの繋がりでありますが、知っている顔が増えていくだけでまちの見え方、関心度は変わってくるはずです」。

ずいぶん、軽い繋がりとと思う人もいるだろうが、PTAや町内会など住所から家族構成その他を知られ、場合によっては負担を強いられる地域団体に入るにはかなりの覚悟がいる。それよりは、まず知り合おう。そのスタンスが面白い会、面白いバーの基本だ。

「面白い会は課題を共有、アイディアで面白がり、やる気を起こさせ、動き出すことを期待するもの。結果としてちょっとずつ動くかもしれない、また、そのほうが実際、動くとも思っています。でも、年配の方は

そうは考えない人も多くて、すぐに解決してくれ、早く結果を出せと成果を求めたがりますね」。

まちの問題の多くは一朝一夕に生じたわけではなく、おそらく解決のためにもそれなりの時間が必要なはず。ところが、ある世代以上の人たちは早急にまるで買い物でもするかのように変革を求める。お金を払って誰かに頼んだら、ある日、手品のように



ある日の笹塚を面白いバー。男女問わず、様々な人が好き勝手に集まってきた。この会が始まるまでこれだけの場があったのにうまく活用されていなかった

素晴らしいまちが出来上がっているとでも思っているのかもしれない。彼らにとってはそれが当然、正義だとしても若い人たちにとっては押し付け、抑圧でしかない。そして、その人たちが主導権を握っているまちも少なくない。そこに参加しようと思えば若い人があるものだろうか。

それよりも唐品氏。「笹塚で夜の街歩きをやった時、地元の人が連れて行ってくれた地域の人しか知らない名店が凄く良かった。食べログや他のメディアではなく、

地元の人が教えてくれる情報は貴重で面白い。地元を好きになる契機になる。それを考えると、商店街の人たちはもっとまちに出て、個を見せるべきじゃないかと思えます。顔が見えて繋がりが増えていけばまちに愛着が生まれ、好循環が始まる。地域の名物店は自然にそんなことをやっているのでしょうか」。

まちの中に知った顔があれば人は外に出る。そしてそれが増えていけば本人にもまちにも未来は少し幸せになる。大き

な大変革ではなく、小さな一歩。今はそういう時代なのだろう。



<http://www.facebook.com/omoshirogaru>

CASE

11

タダで自由に好きなことができる場の求心力、その背景

シェアベース佐渡島 大久保 新氏



人を引き寄せる場には何か、魅力があるはず。だが、その魅力が具体的なモノではないということもありうる。そう感じたのは新潟県佐渡市で数十万円で手に入れた空き家をタダで宿泊その他ができる場所にしている大久保新氏の話聞いたからだ。

父が佐渡出身の大久保氏は友人が佐渡で空き家再生に取り組むにあたり、指南を依頼され、20数年ぶりに佐渡を訪れることに。久しぶりの佐渡はシャッター商店街どころか、まち全体がぐすんでおり、「まずいことになっている」状態。ただ、一方で自然、歴史、食べ物その他に恵まれた島でもあり、「人、モノはあるのにサービスがないだけ。ここなら何かできるはず」と思い、通うことに。

そのうち、10年近く空き家になっていた建物をくれるという話が出た。図書館などのある地域に近く、国道沿い。ただ、雨漏りしているは、残置物はあるはとマイナス点も多数。そうこうしているうちに未登記部分があるなど複雑な話も出てきたが、最終的には大久保氏が買い取るようになった。

ところが、この家、敷地が200坪(660㎡)、建物の延床面積520㎡と半端なく大きい。普通だったら全部直して活用しようとするだろうが、このサイズでは無理。では、どうするか。シェアハウス、ゲストハウスなどで活用するにはそれなりの投資がいる。

だったら、まずは面白いことをしよう。大久保氏が考えたのはタダで使える場所にしてみようということ。

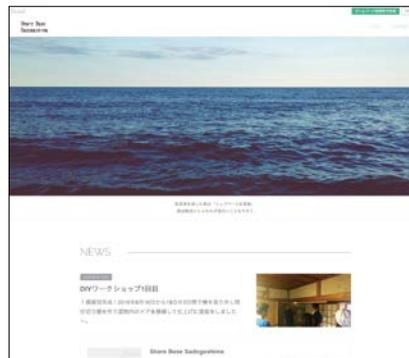
「趣味と思えばいいことはない。固定資産税は年間で10万円はかからないし、出費は光熱費だけ。改装はその時の気分でお金がある時にやれば良い。いずれ一部だけでも活用して収益が出るにはするにしても、とりあえずはタダで好きなことを自由にできる場にしたいです」。

それで何が起ったかということ、人が集まり始めたのである。短期に宿泊した人は数えきれないほど。1カ月以上の長期滞

在者も国内はもちろん、海外からもやってきている。

宿泊したい、利用したい以外では人を紹介したい、引き立てたい、手伝いたい、何かを売りたい、相談したいと実に様々な目的でご近所から、東京から、海外から人が来る。人脈ゼロからスタートしたはずが1年半ほどでびっくりするほどの広がりを見せ、その結果、地元テレビ、新聞に取り上げられるなど地域では一躍時の人である。

タダだから人が集まると言ってしまうえば身も蓋もないが、興味深いのはタダだから利用してやろうというのではない人が多いという点。逆に協力したいと親近感を持って近づいてきている人が多いのだ。お金が絡まないから信用できると思われるのか、タダで好きなことができるという部分が受けているのか、その辺り、



<https://sb-s.localinfo.jp>



立地は良く、広さもあるものの、改装しようとするとなんか狭い感じがする。



何を魅力と考へて人が集まってきたのかを聞いていて正直、よく分からなかった。

なんでタダ?と疑問を抱く人もいる。それでは続けられないだろうと聞かれるそうだ。

「事業化するにはお金も要るし、責任も伴う。であれば無料でやるほうが安くなります。無料であれば泊まった人の責任。その代わり、自分の自由にやりたいことをして良い、それが基本です」。

手伝いたいと集まって来た学生たちに指示を出すこともしない。課題を出すこともなく、やってもやらなくても良い、都合の良いようにこの場を使えと言っているそうだが、面白いことにリーダーに引張っていても引いてもらいたい人たちは引いてい

くという。誰かに責任を取ってもらいたい人は自由になれないということか。自由と責任は裏返しというが、ここはそれを地で行っているのである。

もちろん、そのやり方でうまく行かないこともある。

「残置物を自分のペースでいいから片付けてくれることを条件に滞在してもらったのに、半年経っても何もせず、出て行ってもらった人がいました。作りたくないけれど、約束を守らない人相手にはルールが必要かとその人にだけは明文化したルールを渡しました。幸い、その人以降、それを使うことはありませんが」。

そんなことがあったとしても、大久保氏はシェアベース佐渡島を信頼関係で成り立つ場にしたいと考えているという。

前述の通り、ここでやっていることは商売ではなく趣味。だからここで負うかもしれない経済的なマイナスは自分で責任を負うと腹を括っている。そう思ってしまえば、人は信頼できるし、長期滞在した挙句、一言もなく出て行くような、普通だと腹を立てそうな状況も面白がれている。

と、ここまで聞いて人が集まってくる

理由がようやく少し分かった気になった。大久保氏が腹を括ったことで、一人でこつこつやるはずだったプロジェクトが自然に人を集めるようになり、いい具合に回り始めたのはなぜか。

日本には意気に感じるという言葉があるが、時代が変わってもそうした姿はやはり人の心を動かすのだろう。責任は伴うが、それ以外はタダで自由に好きなことができる場が人を惹きつけているのはもちろん、それを具現化している人の姿にはそれ以上の効果があるように思うが、どうだろうか。

この人の循環に大久保氏は「幸福度、上がりましたね」と言うが、おそらく、関わっている人たちの幸福度も同様に上がっているはず。お金とは関係なく、共感して、関与する喜びがあるのではないかと思うのだ。

ちなみにこの場の目的は佐渡という場所の魅力を広く伝えること。関係人口を増やし、移住する人を増やすこと。そのために安く、長く泊まれる場をというのだが、たぶん、この場所はそれ以上の役割を果たしていると思う。

case 12 参加表明はもちろん、会話すら不要 銭湯という緩くて温かい関係

小杉湯
平松佑介氏(左)
塩谷歩波氏(右)



ここまで意識して人と関わる場合の話を聞いてきた。だが、意識しなくても関われ

る場がある。銭湯だ。

杉並区高円寺にある小杉湯の三代目、平松佑介氏は開口一番、「このところ、社会の分断、孤立をテーマにした取材が多いんですよ」と前日に行われた取材の話をしてくれた。

ファミリーも多く居住する地域であるにもかかわらず、普段の小杉湯は子どもが少ない。800~1000人もが訪れる土日にも多くて30人。平日だと数人ということも。

理由は遠慮。スーパー銭湯、温泉ではおむつの幼児の来場を禁止している。だから銭湯も同じと思われているのだ。だが、

銭湯は「公衆浴場」。公益性があり、おむつ期の子どもの禁止することはない。

それを知らしめるため、小杉湯では月に一度「子連れ歓迎! パパママ銭湯」という日を作り、スタッフが子どもの面倒を見るなど子ども連れの入浴を後押ししている。始まって半年ほどのこの試みを今では1カ月間、いきがいのように思っていてくれるママもいるほどとか。

「全部自分でやらなくてほと思って抱えこみ、追いつめられている人が多いのでしよう。医療、介護その他様々な分野でそれを分断、孤立が問題ではないかと仮定、解決の糸口を求めて銭湯に取材に来てい

a summary

まちの魅力、未来を作るのは誰？ 今、必要なのは人材仲介ができる不動産会社

ひとり暮らしの満足度を上げるために不動産、そのうちでもまちにできることはあるだろうか。そんな分かりにくいテーマを12人に聞いた。明確な答えが見つかると思わずに始めた取材だったが、おぼろげに見えてきたものがある。その流れを以下、簡単にまとめた。

1

ひとつ。ひとはどうやらウチと会社の往復だけでは満足できないものらしい。年上の世代のうちにはそんなモノと割り切って、あるいは仕事最優先と言い切るほうが楽だからか、2つしか世界がないことを当然としてきた人も少なくないのだろうが、これからの時代、人は2つの世界だけしかない、逃げ場のない社会では幸せにはなれない。自宅と会社以外の居場所、役割が必要だし、肩書不要、そのままの自分を無条件に受け入れてくれる場を求めている。

2

ふたつ。かつてはウチと会社の間で中間領域とでも呼ぶべき余地があった。まちや商店街である。そこには日常の何気ない挨拶やお節介、やらなくてはいけない役目などがあり、人は無意識のうちに誰かと繋がっている、支え、支えられている自分を認識していたのではないかと。

3

みっつ。だが、今や、その無意識の関係はほぼ切れつつある。商店街は大手資本との競争に疲弊してシャッターを下ろし、高齢化、後継者不足がそれに拍車をかけた。まちから会話がなくなると同時に顔は見えなくなり、かつては許容された音は騒音に。商店街のみならず、会社も含め、人が集まる集団の中ではたぶん、同じことが起

きているように思われる。他人の領域には踏み込むべからず、である。個人情報保護法、パワハラ、自己責任、様々な言葉が互いの顔を見えにくくしているのである。

4

よっつ。観点を少し変える。人が求める他人との距離感、関係性も変わってきている。拘束力、責任の重い町会や自治会、商店街などのような土地に紐づいた既存の組織は窮屈だと考える人たちが増えているのだ。Webを通じた、いる場所を問わない関係に慣れている世代が増えたせいだろう。

同時に上下以外の人間関係を求める人も増えている。かつての「お客様は神様」の時代から、もっとフラットで、助け合ったり、共感できる関係へという動きがあるのだ。そして、そうした顔の見える、個人が個人として繋がる関係があるまちは人





を惹きつけている。

面白いことにそうしたまちの多くは小規模で大手資本が入りにくい制約がある。顔が見える関係が基本にあると考えれば当然かもしれない。だが、人口の大きなまちでも、時間をかければ互いの顔は見えてくる。誰かが腹を括って動きだせば一人でもまちは変えられるのだ。

5

いつつ。とはいっても、そのうちでも不動産に関わる人間には大きな可能性がある。誰にどんな場を作ってもらうかを差配できる立場にあるからだ。

まちで最初に会う人としてまちを紹介するのはもちろん、大家を口説いて、まちに楽しい変化をもたらす人が入居できるようにしたり、不動産と人だけでなく、人と人をマッチングすることもできるはず。やりたいことがある人の背を場を作ったり、

借りやすい仕組みを生み出して押すこともできるだろう。銭湯その他、歴史的に人が集まってきたパワーのある場を存続させるためにも不動産会社の力は生かせるはずだ。

と、ここまでが取材から読み取ったことだが、最後に一言、書いておきたい。

不動産会社にはまちを変えるポテンシャルがあるわけだが、残念ながら、多くの不動産会社はそれに気づいていない。大家さんの中には自分の持っている物件を戦略的に使うことで地域が変えられることに気づき、動き出している人たちがいるが、それらの人たちに働きかけられる不動産会社にはもっと可能性がある。

記事中に書いたスナックのママのように、カウンターに座った人の一人ずつから打ち込まれた玉を返しつつ、隣に座った人、離れて座る人を繋げ、全員でひとつの同じ歌を楽しめる場を作れるのは不動産会社

なのである。

そこからまちに関わる人が増え、まちに出る言い訳やきっかけが作れば、部屋からまちに出てくる人も増えよう。出てきて楽しい時間が過ごせれば、ひとり暮らしの人たちの幸福度も上がる。

それは同時に不動産会社にとってのやりがいであり、最大の生き残り戦略でもあらず。早く気づいてスナックのママに变身していただきたいものである。

PROFILE

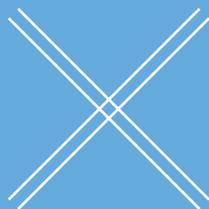
中川寛子（なかがわ・ひろこ）：(株)東京情報堂代表取締役・住まいと街の解説者。編集プロダクションを経て1988年に同社を設立。住まいや街の情報をメディアで発信するほかセミナー等も行う。『解決！空家問題』『東京格差 浮かぶ街、沈む街』（いずれもちくま新書）など著書多数

<http://www.tokyojohodo.co.jp>





いえ



わたし

“脱・孤独”的住まい方 実例6

現場
レポ
ート
2

及川 静香

フリーランス

家は自分だけの休息の場所 それって実は孤独と隣り合わせ？

『住宅幸福論 Episode2』で比較された日本人とデンマーク人の住まいにおける幸福度。全体を通してデンマークと比較して日本は低く、特に単身世帯の幸福度の低さが際立っていた。

2040年には全世帯のうち4割を占めるとみられる単身世帯。都会の单身者向けワンルームマンションは、利便性やセキュリティが高い反面、外と遮断されかなり閉じた空間だ。暮らし方の面でも、日本では自宅に友人を招くことがほとんどなかったり、同じ地域に暮らす親しい友人がいなかったりと、自宅を媒介にし

た交流も少ないという調査結果がEpisode2でも出ている。家は外部を遮断した自分のための休息場所かもしれないが、プライベートでは誰とも交わらない内向きな暮らしは、孤独と隣り合わせのようにも見えてくる。

今回のレポートのお題である「単身世帯の幸福な暮らし」についてあれこれ考えを巡らして、私はある風景を思い出した。

10年ほど前に、スペインのビルバオに旅をした。その目的は、現地に留学中の友達を訪ねること、フランク・O・ゲーリー設計のグッゲンハイム美術館を見ること。しかし実際に訪れて、それ以上に印象に残っている場所がある。それは夕暮れ時のビル

バオの旧市街。狭く入り組んだ石畳の路地を歩いていると、バル文化のスペインではいたるところでバルを見かける。そこでワイワイと飲んでいるのは若者だけではない。おじさん、おばさん、中にはおじいちゃん、と呼べる高齢者もいて、店員や他の客と楽しそうに話をしている。「ここはおじいちゃんが集まるバル、あつちはおばあちゃんが集まるバルだよ。若い人が集まるバルは向こう側」と友人は教えてくれた。

私は、日本の中高年との違いに衝撃を受けた。私の知る中高年（それは自分にとって身近な親や祖父母だが）は、夕食後や休日に近所の友達と飲みに行くことは少ない、というか、ほぼなかったように思う。特に祖父母は家でテレビばかり見ていた姿を覚えている。ビルバオの中高年のように、日常的に外に出て友達や地域の人と交流する姿は、ほとんど目にすることがなかった。

もちろんこれは、文化やライフスタイル、街の規模感といった違いもあるだろう。しかし事実として、OECDの調べによると、諸外国に比べて日本人は家族以外との交流が群を抜いて少ないというデータがある。友人や同僚と業務外で外出したり、サークル活動などに参加した経験が、「一度もない」や「ほとんどない」と答えた日本人男性は16.7%。2位のチェコ人男性は9.7%と、日本人の特に男性の交友関係のなさは突出している*1。また、家族以外のネットワークやボランティア、地域活動への参加など、社会や地域での人々の信頼関係や結びつきであるソーシャルキャピタルも、イギリスレガタム研究所の2017年版ランキングによると、日本は149カ国・地域中101位と、先進国では最低のランキングである*2。

その背景には、労働時間が長く地域と関わりを持つ時間がない、交流する環境にないなど、様々な要因があるだろう。しかしビルバオの風景にあんなに衝撃を受けたのは、年を重ねるにつれ、社会から孤立していくことに、個人的にも漠然とした不安を感じていたからだと思う。孤独は、様々なメディアでも特集されるように、幸福度や健康にさえ影響を与えることが実証されている社会課題である。もちろん、そこに陥る可能性があるのは中高年だけではない。単身化が進展する社会で幸福な住まいを考えると、「孤立」は無視できない問題だと感じている。

時間も環境もない単身世帯が「暮らしを楽しむ」とは？

本編に入る前に私自身についても紹介したい。私は昨年未まで、リノベーションの企画・設計を手がけるブルースタジオで広報を担当していた。それ以前は大手ディベロッパーで、ベンチャー支援オフィスの運営に携わっていたが、転職のきっかけは自宅のリノベーション。5年ほど前に当時築17年の中古マンションを購入し、部分的に改修を行った。その結果、多くのリノベーション経験者と同様に「家にいることが楽しくて仕方がない」と思うようになった。もう少し掘り下げれば、家がまさに自分の居場所だと感じられ、素に戻れるリラックス感があり、それが翌日の活力にもなった。休日に友人を招き、持ち寄った料理を囲んで飲み明かした夜も少なくない。住まいが充実すれば、毎日がもっと豊かになる。家が人生に与える影響を、私は身をもって体験した。

そんな経験から、「暮らしの可能性をたくさんの人に伝えたい」という想いで多様な住まいを発信してきた一方で、暮らしをあまり楽しんでいない人も目にしてきた。Episode2で「住まいの幸福には、自分が自分の住まいを良くしていこうという主体性が重要である」と分析がなされているが、特に、人生プランとともに今後の住まいが変わる可能性が高い単身世帯にとって、住まいの優先順位は低いように見える。仕事や遊びには時間とお金を費やすが、家に手をかける時間も意欲もない。もしくは、原状回復義務の強い賃貸住宅では壁に絵を飾ることすらためられる。広さ的に友人を招きにくい、という可能性もあるだろう。時間も環境もない単身世帯が、「主体的に暮らしを楽しむ」には、何をしたらよいのだろうか。どうしたら彼らは住まいで幸福を感じられるのだろうか。ここにもう1つ、単身世帯の家を考えたときの課題があるように思う。

今回の取材では、6つの賃貸住宅を訪れ、そこに暮らす単身世帯の方々に話を聞いた。それぞれの暮らしぶりを拝見しながら、住まいをどう楽しんでいるか、その結果彼らの生活や人生にどのような影響があるのかまで見ていけたらと思う。さらに、孤立化という社会問題を見据えつつ、「単身者にとっての幸福な暮らし」のために住宅ができることやその可能性について、解像度をあげながら探っていきたい。

※1：『「居場所」のない男、「時間」がない女』水無田気流、日本経済新聞出版 ※2：2018.11.3 東洋経済「『孤独』という病」

あかぎハイツ

千葉県松戸市／築年：1974年／テナント12戸・住居60戸

松戸にある「ほのぼの賃貸」 あかぎハイツ

松戸駅から乗り換え、新京成線みのり台駅で降りて歩くこと5分。茶色と白のレトロな外観のマンションが見えてくる。様々な種類の植物がバランスよく植えられた小道を進み、エントランスを入ると、もうすぐやってくるクリスマスに向けて、ツリーが飾られていた。抑えた色合いながら、きちんと選ばれていることが分かるオーナメントや、装飾のやさしい光にほっと一息つく。

「こんにちは」と、控えめな様子で声をかけてくれたのがオーナー一家の3代目である赤城芳博さん。芳博さんはこのエリアで大家業を営み、奥様の真樹子さんとともに、物件の管理から改装までを手がけている。取材のために案内してくれたのは、ご自分でリノベーションをした1階のアトリエ。白と木を基調とした、シンプルながら温かみのある室内は、友達の家に遊びにきたような、親密でゆったりした時間が流れている。

「6～7年前ごろから空室が目立つようになり、なんとかしなくちゃと、貸室のリノ

ベーションを始めました。経験はなかったですが、自分でもできるんじゃないかなと思って」と芳博さん。

最初はプロの手を借りて改修を進めていたが、徐々にスキルも身につき、今では自分で大工として工事ができるほどの腕前。一部の部屋をフルリノベーションし、DIY可能などとサイトで打ち出すことで、徐々に空室も埋まっていった。

DIY可能にした背景は？

あかぎハイツは、最初からDIY可能物件だったのではない。「楽しんで住んでくれるのが一番」と、数年前より退去時の原状回復義務をなしとした。DIY可能な範囲についても「楽しく住んでくれる範囲なら、相談してもらえれば協力したい」と非常に大らか。リノベされていない既存のままの部屋では、シンクを増やしたり、収納棚に壁紙を貼ったりと、かなり自由にDIYがされているようだ。入居者がどの程度手を入れようと、原状回復なしで出て行く。その部屋を、次の入居者がそのまま使っているという状況である。

また、DIYをしたい時は、大工であるオーナーにやり方も相談することができる。入居者が事務所に相談に来ると、赤城さんは時間があればそのまま工具を持って向かうのだそう。相談や手伝いは基本的には無料。ただ、躯体にアンカーを打つなど、特別な道具が必要な場合はお金を受領しているが、その金額はアンカー1穴100円から！

「費用は頂かなくてもい

芳博さんがセルフリノベーションをしたアトリエ。オープン日には、住人のママたちがここに集まることもある



いんだけど、入居者さんがお礼をしたいと言うので…」と話す芳博さん。工事方法を相談できて、自分でできないことはオーナーが手を貸してくれる。さらにそれが数百円単位。DIYのハードルがとにかく低いこの環境、ととてもうらやましい気持ちになった。

マイペースにDIYを進める マリコさんの暮らし

オーナーから、マイペースにDIYを進めているというマリコさんを紹介してもらい、お話を聞くことができた。マリコさんは、ニューヨークとロンドンで10年ほど暮らし、2年半前に帰国。今は自宅でマッサージサロンを開業している。

「帰国直後は日本的なスタイルが懐かしくて、畳のある賃貸に暮らしていたんです。けど、壁の穴一つ開けることもできない環境に窮屈さを感じて、DIYができる物件を探しました」。

もともと壁に漆喰を塗りたいと思っていたマリコさん。内見時に、やりたいことを一つずつ赤城さんに伝えていったところ、「いいですよ!」と全部に対してポジティブな返事。「受け入れられた」という気持ちになり、導かれるように入居を決めたそうだ。

マリコさんのDIYはスローペースだ。経



オーナーの赤城芳博さん、真樹子さんご夫婦

左から:普通の鏡から取り替えたミラーキャビネット/キッチン横にも棚をDIY/漆喰を塗るための道具類
(写真提供:マリコさん)



済状況に合わせて優先順位をつけ、できるところから行っている。念願だった壁の漆喰塗りは、キッチン、リビング、トイレと、ベッドルーム以外の部屋はすべて完了。

「最初は勝手が分からなかったのですが、オーナーのお父さん(2代目)に相談をしました。漆喰を塗るのはかなり大変。でも、漆喰を塗ることで空気が全く変わるので、満足をしています」。

また、洗面所の鏡も、IKEAのミラーキャビネットに取り替えた。洗面所の壁には、手持ちの道具だと穴が開けられず、ここはオーナーにお願いした。

「1つ100円で開けてくれるなんて、和菓子を買うのと変わらないですよ!今洗面は取り替えたので、あとは隣に棚を作る予定」ととっても楽しそう。他にも、キッチンや玄関に棚を作ったりと、必要な場所に、必要な家具を足していつている様子だ。

オーナーとのほどよい距離感

マリコさんと話しているとオーナーの話題が多く出てくるだけでなく、芳博さんを「よっちゃん」と親しみを込めて呼んでいるのが印象的だ。引っ越し直後は、女性のひとり暮らしということで漠然と不安を感じていたそうだが、オーナーから「何かあったら上にいますから」と言われほっとしたと言う。また「DIYでこんなことした

い」とどんな突飛なアイデアを伝えても、偏見を持たずに受け入れてくれるオーナーの存在は、マリコさんにとって「安心」だという。

「共用部分もすごく穏やかで綺麗なんですよ。今の季節はクリスマスツリー、夏には七夕の笹が飾られていたりして、帰ってくると玄関飾りに癒されますね。『ただいま』という気持ちです。

あと、ここでの暮らしは、好きなものを取り入れやすく、苦手なものとの距離を取りやすいですね。オーナーとの距離感も、近すぎず、遠すぎず、ほどよい。それぞれが尊重されている感じがします」。



「今の暮らし、すごく幸せ」と話すマリコさん。このまま一人かもしれないという不安はあるが、今はとても快適に暮らしているそう。近所の和菓子屋でおまけをしてもらったり、不動産会社に誘われて地域のイベントに参加をしたり、あかぎハイツを中心に、街とのつながりも生まれている。

オーナーの想いがつくる 空気感

随所で「ほのぼの賃貸」と紹介されている通り、ゆったりと温かい雰囲気が印象的なあかぎハイツ。その中心には大家さんがいる。DIYについては、和菓子を買に行くような気軽さでできるため、自分にとっての快適を追求しやすい環境だろう。

赤城さん夫婦のどちらからも、「住んでいる人を楽しんでもらえれば」という言葉がでてきていた。DIYだけでなく、温かな気持ちになるエントランスの季節飾り、掃除が行き届いた敷地など、物件の随所にその想いが現れていた。こういう細やかな気遣いがあかぎハイツの大きな魅力なのだろう。



七夕シーズンには、エントランスに笹が飾られる/剪定したローズマリーをオーナーからおすそ分け



カマタ_ブリッチ

東京都大田区/リノベーション竣工:2015年/戸数:テナント3戸・住居8戸

「屋上から設計図の紙飛行機を飛ばせば、3日後には製品になって戻ってくる」

これは、町工場が約3500ある「ものづくりのまち」大田区を表した言葉だ。家族経営や、住居が工場と一緒にといった小規模な町工場が発展してきたエリアで、一工場で担えるのは一工程というところがほとんど。しかし、たとえ自社工場では切削作業しかできなくても、この地域では近隣にある別の工場に後の工程を依頼し納品するという、「仲間まわし」と呼ばれる近隣ネットワークが築かれていた。冒頭の言葉が表すように、産業が発展していても地域ネットワークが残されたエリアなのである^{※1}。

この大田区の真ん中を流れる呑川（のみかわ）沿いに、蒲田駅から10分以上歩いたところにあるのが、今回取材をしたカマタブリッチだ。本物件は、2015年にブルースタジオにより全面的にリノベーションが行われ、1階に工房およびシェアオフィスを持つ賃貸住宅として生まれ変わった。工房スペースでのものづくりの風景を街にも発信していきたいという想いから、1階はガラスの建具が取り入れられた。オーナーの茨田禎之さんは、同じく蒲田駅周辺や近隣の梅屋敷駅周辺で複数の不動産を所有しており、「カマタクーチ」や「カマタソーコ」など様々なプロジェクトに関わっているのだ。

内装のかわこよさに惹かれて入居

この物件に、4年半ほど前に入居した神村玲さんのお部屋を訪ねた。広さは33㎡ほどで、大きなステンレスのキッチン、コンクリート表しの壁、窓辺の天井に取り付

けられたガス管など、無骨な内装のワンルーム。甘さのないインテリアと、黒髪ボブの神村さんの雰囲気がかっこよく、部屋の中央に置かれたローテーブルを挟んで話を伺った。

「もともと東京R不動産のサイトが好きでよく見ていたんですが、『料理好きの男性が住む家』と紹介されていたこの物件の、内装のかわこよさに惹かれました」。

好きな内装のテイストで、手持ちの家具も合いそうだという理由で入居を即決。1階にシェアオフィス&工房が入っていることも面白いと感じ、同年代の面白い人たちとの交流にも期待をしていた。

工房を活用したユニークな入居者特典

カマタブリッチには、工房を活用した入居特典プログラムがある。それは、入居者が1階のシェアオフィスを使う建築家やクリエイターと2人一組になって1つ家具を作れるというものだ。2015年5月ごろに開催された初回のイベントでは、ペアを決め、木材が与えられ、各自で作りたい家具を考えた。そこに、神村さんを含めて、4~5部屋の方が参加し、椅子や靴箱など様々なものに挑戦することになった。

神村さんは、花の教室に長年通っており、植物を育てたり、花を生けることが好きだったため、ワンルームの部屋に花を飾れる場所がほしいと、壁付けの棚を製作することに決めた。さらに、花を生けるためにたくさんの試験官を集めていたので、試験官がぴったり入る穴を開け、穴を波のようにカーブさせて配置し、花が波打つように

上:外観、下:1階の工房。奥にはショップボットがある。



飾れるデザインとした。ペアになったクリエイターは建築家。

制作の過程は、要望やデザインは神村さんがまとめ、それをクリエイターが設計図に落とし、一緒にショップボットで切り出し仕上げていく。完成までには半年ほどかかった。

「4年経った今でもこの空間をどう使うか考えるのは楽しい。季節感を出したり、自分で自分がやすらぐように演出したり、ニヤニヤしながら生けています」。

また、この制作をきっかけに、初回イベントに参加していた入居者同士とは顔見知りになり、挨拶をするだけでなく、制作の進捗を尋ねたり、完成品を見に来たりする関係性も生まれた。

自分をリセットできる 自慢の家

東京に来て16年。4回引っ越しをしているが、今の部屋が一番居心地がよいと話す神村さん。家で過ごすことで、外での日常生活からリセットができるのだと言う。その理由は、まず部屋が好き。つまりインテリアや飾り付け含めて気に入っている。また、この家に引っ越してきて、人がよく遊びに来るようになった。友人とホームパーティを開くときにも、友達にとっても居心地がよいのか、みんなが集まりたがるのだそうだ。さらに、二重サッシなので、外の音が気にならず、築40年超ながら冬も寒くなく非常に快適だという。

また、入居当初のイベントで知り合った人だけでなく、オーナーである茨田さんが所有する他の物件の入居者ともつながりができている。そのきっかけはオーナーが主催した、全物件の入居者に声をかけた忘年会だ。茨田さんは、エリア内で様々なイベントを仕掛けており、それを神村さんも面白がって参加をしてきたことで、生活圏内に知っている人が住む家や店舗が増えているそうだ。

「今までの賃貸は、『何かあったときに周囲の人に声をかけられない』という不安がありました。顔が見えない相手だと、物

音に対してネガティブな気持ちになってしまっていたと思う。けど今は、誰が住んでいるか分かるので、物音がしても生活が想像できます。この家は、居心地がよく安心感を持てる場所。今の家は、自分にとって自慢です」。

近隣ネットワークが生む 暮らしの安心感

カマタブリッチの工房と、それを活用した入居者特典は、継続性を持たせたことで、その後も入居者同士の交流が続ききっかけになっている。プロと工作機械を使って作る家具は、DIYの上をゆく取り組みだが、神村さんとの会話から、趣味につながる家具を自ら作り取り付けたことで、部屋への愛着が一層増していることがうかがえる。自分の世界を自分の手で作る楽しさや、「家が好き」という幸福感が、日常をぐっと豊かにしていることは間違いないだろう。

また、オーナーが介在し、街や人とのつながりが広がっていった結果、何かあったら相談できる人が近くにいる「安心感」が生まれていた。いざというときに助け合える人が生活圏内のそこそこにいる様子は、まるで町工場の「仲間まわし」のようだ。コミュニティに属している感覚が「自分の

室内。壁には制作した棚が取り付けられている



温かい時期には生花を。玄関を入ると目に入る「波の花」だ



今回お話を伺った神村玲さん。雑貨や植物が部屋の中にセンスよく飾られている



居場所」という気持ちをぐっと高め、街や家への愛着を育てているようだ。



左：1階で開かれたイベントの様子／右：1階はオープンに開かれた印象のカマタブリッチ外観

case 03

交流も居場所も選択式 180世帯が暮らすソーシャルアパートメント

ワールドネイバース護国寺

東京都文京区／リノベーション竣工：2013年／戸数：180戸

都心を中心に若い単身世帯の暮らしスタイルとして定着しつつあるシェアハウスやルームシェア。2019年の日本シェアハウス連盟の調査によると、全国には4867のシェアハウスがあり、全国各地で引き続き増加している。ソーシャルアパートメントとは、「従来型のワンルームマンションに、ラウンジなどの充実した共用部が付いた新しい暮らしを提供するマンション」で、1物件を共有して暮らすシェアハウスとはコンセプトが異なる。入居者は20代半ばから30代半ばが多く、男女比は半々程度、外国人が全体の2割ほど住んでいるようだ。

事業主は株式会社グローバルエージェント。2006年に第一号物件をオープン。現在は、関東をはじめ、大阪、京都、兵庫、札幌など、全国に物件を所有し、44棟2500戸を超える数の部屋を提供している。年々人気を集め戸数を増やすソーシャルアパートメントでの単身世帯の暮らしぶりを拝見しに実際にお邪魔してみた。

ワールドネイバース護国寺の概要

有楽町線の護国寺駅から徒歩6分に位置する「ワールドネイバース護国寺」は、約10㎡の居室と多様な共用部、そして住人だけでなく近隣エリアの住人も使えるカフェを併設する、180世帯が暮らす大型のソーシャルアパートメントだ。

個室は、クローゼットと洗面台、そしてエアコンが備え付けられた、約10㎡というコンパクトな空間。一方で共用部は非常に充実している。6台のIH調理器とシンクを備えるキッチン。併設するダイニングは、自然と視線が交わるように設計された円形の大きなテーブルが中心だ。生活機能以外にも、ビリヤード台があるバーラウンジ、仕事や勉強ができるワーキングスペース、スタジオのように使えるマルチパーパスルームなどを備える。加えてこの物件は屋上が開放されている。本を読んだり、ビールを飲んだり、都会のど真ん中で開放

的な空間を自由に使えるのはうらやましい限りだ。

掃除については、ハウスキーパーが週6日で入っている。整理整頓や清潔感の

感覚は人それぞれ。綺麗好きがそうでない人に不満を抱きがちなため、そのようなトラブルを回避する目的もある。ちなみに、護国寺の物件はシャワーとトイレも共用で、ここにも外部の掃除が入っている。

ワールドネイバース護国寺の外観

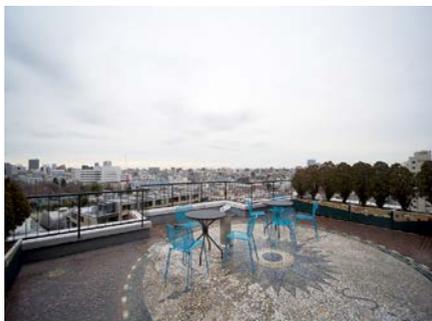


交流も「選択できる」仕掛け

ここでは入居者同士の交流を前提としているが、運営会社がコミュニティづくりに携わるのは物件のオープン時のみ。その後は新しく入居した人を、前からいる人が巻き込んでいく形でまわっている。定期的で開催される新規入居者の歓迎会、クリスマスパーティ、ヨガ教室といった様々なアクティビティは、物件ごとにFacebookグループがあり、入居者自らが企画・募集をしているのだ。

また、ちょうど訪問した時はクリスマス前で、クリスマスパーティの準備がバーラウンジでなされていた。1年のうち一番大きなイベントということで、入居者の8割ほどが参加をする。こういったイベントの企画から準備も、すべて入居者により自発的に行われている。

交流前提の一方で、押し付けられないも特徴である。エントランスから自室までは、共用部を通らなくても行ける動線になっており、交流するかどうかは「選択式」だ。



上：バーラウンジ／マルチパーパスルーム、下：個室／屋上

左：バーラウンジで翌週のクリスマスパーティの準備をする大泉さんたち／右：訪問時のキッチン・ダイニングの様子



そんな環境での暮らしぶりを、入居して2年8カ月ほど経つ大泉さんに聞いてみた。

大泉さんの暮らしを拝見

大学でシステム工学を研究する大泉さんは、一緒に暮らす仲間から「教授」と呼ばれている。落ち着いた物腰で丁寧話す彼にぴったりのあだ名だ。まず入居の理由を尋ねると「職場に近いこと。あと、水回りが共用なので、掃除しなくていいということですかね。水回りの掃除が苦手で」。

もともと特に交流を希望していないという事実、拍子抜けしてしまう。しかし逆に考えれば、ここは交流を除いても、選びたくなる賃貸ということなのだろう。

大泉さんの暮らしは、起床してシャワーを浴び、ラウンジで朝食をとり職場へ。夜は帰宅すると、ラウンジに降りていき、部屋に戻るの寝るときだけだ。食事は、居合わせた人と一緒に食べたり、事前に連絡を取り合って何人かで鍋を囲んだり、一人で食べることは少ないという。

休日やイベントも一緒に楽しむ仲間

休日も他の住人と一緒に過ごしている。例えば、これまで一人で出場をしていたス

パルタンレース。入居して2年目に興味のある人を募ったところ、何人かから手があがり、一緒に練習をするようになった。また、趣味のスキーも、これまで一人で行っていたが、今では住人同士で行っているそうだ。

「今の生活に不満はないですね。退去も考えていません」と話す大泉さん。

ちなみに大泉さんは、学生時代にひとり暮らしも経験している。当時、食事はだいたい一人。

「一人なので料理をすることもなく、外食が多かったですね。ひとり暮らしはやはり孤独。狭い部屋に一人でずっといるのは寂しいように思います。ここにいと土日すぐに埋まるし、孤独を感じないですね」。

良い意味での「逃げ場」をつくる匿名性

ソーシャルアパートメントを訪問して、私は海外のユースホステルのような印象を持った。常に誰かいることが当たり前。タイミングが合えば、自室に戻るまでの時間を誰かと過ごす。一人で映画を見るよりも、誰かと見て感想が言い合える楽しさと気楽さがある。

また、もし苦手な人がいたとしても距離

を取りやすい環境だ。物理的に共用部がいくつもあるので、別の空間に移動すればよい。さらに、人数が多いことでコミュニティ内の匿名性が高まり、ほどよいゆるさ生まれている。良い意味で逃げ場があることで、気負わずに暮らせる環境が作り出されていた。

ちょうど訪問をした20時半ごろは、キッチンもダイニングも賑わっており、食事をする人、映画を観る人、料理をする人など思い思いに過ごしていた。もし一般的なワンルームマンションなら、20時半に一人で暮らす家に帰り、買ってきたお弁当を温めて食べ、一人でテレビを見て、お風呂に入って寝るだけだ。しかしここでは、帰宅すれば人がいる。今日あったことを話したり、季節イベントを一緒に楽しんだり、人がいることで暮らしにもリズムが生まれるだろう。そんな環境は、心温まるのかもしれない。



話を伺った大泉さん



伸び続けるペット市場、 ペットは家族になった

2017年度のペット関連総市場規模は1兆5193億円。前年度比101.4%の伸びで、2018年度、19年度も拡大が見込まれている^{※1}。

実はペットの飼育頭数はここ5年間で300万頭減少しているのだが^{※2}、少子高齢化や核家族化の影響で、ペットをまるで子どものような位置付けでかわいがる「ペットの家族化」が起きているようだ。一緒に旅行をしたり、健康のためにオーガニックフードを与えたりと、「ペットにしてあげられることは、何でもしてあげたい」という行動が、ペット市場の成長を支えているのだ。

ペットを飼っているのは、単身よりもファミリー世帯の方が多いのが実態。しかし、アニマルセラピーの効果でも認められているように、ペットを飼うことで寂しさを紛らわせる、癒されるのも事実。今後もペット市場が拡大していくことを見据え、単身世帯におけるペットとの暮らしも掘り下げてみたい。

ちなみにペットと住まいの関係を見ると、国土交通省によれば、大都市圏を中心に2000年頃からペット飼育可のマンションが急増。ペットと暮らせる賃貸物件としては、「ペット可」と「ペット共生型」があるが、今回はウェディングがでるほど人気の「ネコ専用のペット共生賃貸」があ

ると聞き取材に向かった。

人もネコも快適な、 ネコ共生住宅

杉並区のお宅にお邪魔すると、薄茶色のフワフワした毛並みのネコちゃんが出迎えてくれた。人なつこくすり寄ってくる姿に、こちらの気もゆるみ、すっかりくつろいだ気分になる。ここはネコ共生賃貸物件のコンサルティングをつとめる木津イチロウさんの賃貸併用住宅だ。

「もともと自分が2匹の野良猫を保護し、彼らと暮らせる賃貸住宅を探していたのですが、ペット可賃貸はどれも犬向け。さらに多頭飼いでできる賃貸物件が見つからなかったんです。なので、ないなら自分で作ろうと」。

ネコ先生の賃貸住宅が完成した後は、他社物件のコンサルティングなどを行い、これまでに6件の実績がある。

木津さんの物件は「ネコと人が快適に住める賃貸」を目指している。室内には大きく4つの工夫が盛り込まれている。

まずは、ネコ用のトイレ置き場。飼っている頭数+1のトイレが置けるスペースを、トイレや洗面に確保している。水回りに設置することで、換気や掃除の面でも便利だ。

2つ目は玄関と居室の間に設けられたネコ脱出防止の扉。来客時に逃げられないようにという理由に加え、ネコと距離を

置きたいときにも機能する。外出前に毛をとるため洋服にコロコロをかけたり、お米などネコに触られたくないものの収納などに使われているそうだ。

3つ目はネコが3次元で動けるキャットウォークの設置。ネコが好む外が眺められる場所や、日向ぼっこができる場所にキャットウォークを設けている。しかし、登るためのステップは、年齢や個体差によって使えないこともあるので、入居者が飼い猫に合わせてカスタマイズできるよう設置をしていない。

4つ目は、テラスに設けられた高さ2mの隙間のない扉をつけている（1階の住戸のみ）。これにより、ネコを脱走の心配なく外に出してあげることができる。また、プライバシーの確保という観点では人間にとっても都合が良い。

また、ハード面だけでなく、入居のルールも設けている。例えば、糞尿がご近所トラブルの元になるので完全な室内飼いにすること、爪とぎグッズを置くこと、避妊／去勢手術をすることなど、物件内外お互いが快適に暮らせるよう配慮がなされている。

高谷さんと、ネコ2匹の 暮らしぶり

続いて、木津さんが手がけた横浜のネコ共生物件「Seilan Apartment（せいらん



左:高谷さんはネコ2匹と暮らす。こちらはアズキちゃん/右:もう1匹のキナコちゃんと高谷さん



アパートメント)に単身で暮らす高谷さんを訪ねた。

彼女は、ここに引っ越しをしたことで、通勤時間は30分から70分と2倍以上増えたそうだ。

「えー、そんなに!」と驚いていると「通勤時間は私がんばるから、ネコに幸せな時間をあげたい。迷いはなかったですね」と笑う。

ネコ2匹と暮らす高谷さんは、以前は一般的な「ペット可」の賃貸に暮らしていた。更新の際にこの物件に興味を持ち、内見したところ、テラスに目が止まった。「この物件なら気兼ねなく外に出して、日向ぼっこをさせてあげられる!」これが決め手となり入居を決意した。実際に今は、春夏は開けっ放しにし、ネコたちがいつでも好きなときに出られるようにしているそうだ。

以前の賃貸と比較した感想を聞くと「すべてが違う」とのこと。

「ネコを飼うことを前提に作られているので、広さもあるし、設備も整ってます。また、みんながネコを飼っているので音などもあまり気にならなくて。ペットを飼うにあたってのストレスが全くないですね」。

相談はSNS。

入居者同士でペットシッターも

せいらんアパートメントには、現入居者だけが参加するSNSグループがある。この物件に暮らす大家さんが管理をしており、ネコ関連の情報交換や、困りごとの相談などで使われている。

ペットを飼うときに一番ネックとなるのは、旅行など長期で不在にするタイミング。

そんな時も、このグループ内でペットシッターを依頼しているそう。受けてくれるのは、他の入居者や大家さんだ。

シッターを依頼する際、まず最初は在宅時に訪問して、トイレやグッズの場所を確認する。あとは鍵を受け渡し、伝言があればノートに記載する。信頼できるシッターを探すのは大変だというが、ここでは手間や費用面での負担が軽いだけでなく、知っている人に世話をお願いできる安心感も大きいようだ。

不在時にはネコの世話を頼み合い、SNSで気軽に相談もし合う間柄だが、実際に顔を合わせる機会はほとんどないという。

「困った時の相談以外は、特に交流はないですね。田舎のように干渉し合うこともないですが、都会のように誰がいるか知らないというほどでもない。どこに誰がいるか、どんなネコちゃんがいるかは知っているの、安心感がありますね」。

あなたが幸せなら私も幸せ

高谷さんが「すごく腑に落ちた」と、人とペットの関係性について分析されたブログが興味深い※3。

「人間と犬は、主と従。亀は介護。鳥は恋人。そして、猫は宗教。神と信者のような関係で、部屋をボロボロにされても、服が毛だらけになっても、『あなたが幸せなら私も幸せ』となる狂信者」とある。

「私の暮らしはネコが優先なんです。賃料は相場より高くても、住まいはネコが幸せな方を選びたい。どんなに外でストレスがあっても、帰ってきてこの子たちに会う

とスッと気持ちが落ち着くんですね」

ネコがつなぐ 鍵を預け合う信頼関係

通勤時間が2倍以上になっても「ネコが幸せなら」と話す高谷さんだが、実際木津さんが手がけた物件では、条件よりも広さや使い勝手など、ネコと共生する上での機能が充実している方が人気が高いそうだ。

この物件で興味深いのは、ペットシッターという名目で不在時にカギを預けられる関係が結ばれている点。ネコを媒介お互いを信頼し合う、うっすらとしたコミュニティができています。この安心感を担保する背景には何があるのだろうか。「ネコを飼っている人に悪い人はいないだろう」という気持ちなのだろうか。もしくは、高谷さんの場合、最初に困ったときにシッターをしてくれたのは大家さん。助けてくれた大家さんがコミュニティの発端となっていることにより、安心感が持てるという側面もあるのかもしれない。

いずれにしても、不在時に協力し合える人が近くにいることで、単身者のペットを飼うハードルは格段に下がる。単身向けのペット共生住宅は、これからさらにニーズが大きくなるのではないだろうか。



※3: 【twitter】MikasaLove611

【ブログ】<https://nekonavi.jp/archives/author/mikasalove611>

建物の外観。こちら側に開かれた扉や窓が店舗



副業兼業が進む時代。 暮らし方と働き方は変化する

練馬駅から住宅街を抜けて歩いていくと、目の前に現れる開けた空間。道路から一段高くなったウッドデッキは、ちょっとした公園のように広々している。建物の裏手には庭があり、赤く色づいた紅葉やオリーブが植えられ、柑橘系の木には実がなっている。ウッドデッキもお庭も、手入れが行き届いてとても綺麗だ。建物の外壁は濃いグレー。そして、各階には、明るい木に縁取られたガラス張りの扉や窓が並ぶ。この額縁のような扉や窓、実は店舗なのだ。

ここは、東京都練馬区にある、築38年の鉄骨造2階建てアパートをリノベーションした賃貸住宅「櫻の音 terrace」。住みながら商いをする「ナリワイ」を持つことが入居条件という店舗併設の賃貸住宅である。

リクルートワークス研究所の調査によると、副業している人の割合は、2012年の3.6%から2017年は4.0%と微増している。一方で、今は副業をしていないが、今後したいと思う人の割合は33.5%で、3人に1人が副業を希望しているのが実態のようだ^{※1}。

その背景として経済的な理由を挙げる

就業者が多いが、「新しい知識や経験を得る」というキャリア向上のために希望する人も一定の割合で存在する。人生100年時代において、仕事、自分、そして暮らし方の関係性を見直す人が増えているのだろう。今回取材をした

櫻の音 terrace は、働き方・暮らし方が多様化する時代に、住まいのひとつのあり方として「ナリワイ型賃貸住宅」を提案しているのだ。

ナリワイ型賃貸 「櫻の音 terrace」とは

13戸の店舗併用住宅が入る本物件。1階は「しっかりナリワイ」タイプで、テラスに面して約8㎡の店舗スペースがある。ここは週4日以上店をオープンすることが条件。今はカフェ、雑貨店、子ども向け学習教室など6店舗が入っている。2階は「ちょっとナリワイ」タイプ。副業で何かしたい人を対象としたディスプレイ窓がある部屋だ。各住戸には大小2つの窓があり、商品や作品を展示することができる。のぞいてみると、どのディスプレイも素敵!しっかりと自分の店舗の世界観が表現されていた。

ここでは2〜3カ月に1度「ナリ間ルシェ」と呼ばれるマーケットを開催しており、その時はすべての店舗がオープンする。しかし基本は自分のペースで店を開けることができるので、副業・兼業として商いをしやすい印象を受けた。実際に、入居者のほとんどが他に仕事を持っているようだ。

また「ドゥ・スペース」と呼ばれる共用部もある。マルシェの時の休憩スペース

や仕事の打ち合わせ、入居者同士で鍋をしたりと、住民は誰でも自由に使うことができる。2階にあがる階段付近にあるため、帰宅時に通りかかると中で集まっている他の住人から声をかけられ、そのまま食事に合流する、なんていうこともあるようだ。

朋子さんの暮らし

2階のディスプレイ窓付きのワンルームに暮らす松永朋子さんは、リノベーション竣工時から入居をしている。玄関を入ると土間スペースになっており、すぐ傍にディスプレイ窓がある。その奥がキッチン・ダイニング、さらに奥が寝室兼くつろぎの場。各スペースは布で仕切られており、人



お話を伺った朋子さん



朋子さんの部屋。上は玄関土間とダイニング。下は奥のくつろぎスペース



通路に向けて設けられたディスプレイ窓

を招き入れるパブリックスペースと、その奥のプライベート空間が上手に区切られていた。高い天井、木の壁、古い梁や柱も随所に見えて温かみと開放感がある。居住空間としてとっても魅力的!

実は朋子さんは、本物件の企画設計を担当したスタジオ伝の藤沢百合さんのご友人。

「元々この近くに住んでいて、完成前から物件の話聞いていたんです。純粹に楽しそうって感じました。そして、ここにいらなかったら後悔するとも思いましたね」。

入居条件である「ナリワイ」については入居後に考え、石巻ベーグルの販売を選んだ。営業するのはマルシェ時のみだが、マルシェでは毎回完売という人気ぶりだ。

掃除やDIY、畑作りも入居者で

こちらの物件は自主管理。大家さんは、このエリアに複数の物件を所有する方で、今後自分たちが年と共に管理ができなくなることを懸念し自主管理という形をとった。

「ドゥの日」と呼ばれる大規模清掃日が月1回設けられ、共用部清掃や庭の草取りなどを住人みんなで行っている。その他、隔週での日常的な掃除当番のほか、DIYや

畑作りといった作業もある。基本的には作業はみんなで行うが、もちろん、仕事などで参加ができないときもある。その場合は、出不足料を支払い、それがマルシェの打ち上げのビール代などで使われるという形で運営されているようだ。

朋子さんに以前の賃貸暮らしとの違いを聞いてみた。

「以前は、他の入居者の顔が分からず、音やタバコの煙などイヤだなと思うこともありましたが、今は全くないですね」。

ここは掃除やマルシェなどで時間を取られますが、みんなとしゃべりながら行うので、それが逆に仕事との切り替えになっています。といっても、作業日に体力的にどうしてもしんどくて、家にいながら気配を消していたこともありましたが(笑)。

ただここは、休日にふらっと他の店舗を訪ねて話したりコーヒーを飲んだり、知り合いと日常的に交流がもてる環境ですね。仕事が忙しくて夜が遅い日が続くと、『最近夜いないでしょ?仕事忙しいの?』と声をかけてもらったり。普通のご近所付き合いより近い感じがしますね」。

大家さんの存在、地域との関係性

入居者間のこのような関係が作られているのは、物件のコンセプトが「ナリワイ=店舗運営」というのも大きなポイントだと、企画を担当した藤沢さんは話す。お客さんを迎える場所という性質上、店先を綺麗にしておきたいという意識はみんな高い。

「商店街で、一人で店舗をやっているおばあちゃんが、店先から離れるときに、隣にちょっと店番を頼むということがありますよね。ここもそれに近いのかなと思っています。常時オープンしていない2階の本屋の本が、1階の雑貨店に置かれていたり、店舗としてお互いに助け合う意識があるように思います。入居者がお互いに気遣い合う関係ができあがった背景には、こういう理由もあるのかもしれません」(藤沢さん)

さらに櫂の音 terrace では、交流のツールとしてLINE グループを作っている。入居者、企画・設計者のほか、大家さんもグループに入っているようだ。大家さんもみんなのナリワイを応援したい気持ちを持っており、初めてマルシェを開催するにあたっては、地域の1軒1軒を回って、説明をしてくれたのだそう。そんな背景もありマルシェには近隣の方も多く訪れ、入居者同士だけでなく地域とのつながりもゆっくと育まれているようだ。

関わりの多さから生まれる密なご近所付き合い

櫂の音 terrace はナリワイが入居条件。入居者は全員、店舗という自分を表現できる場を持つ。自分の趣味や得意なことを発信するので、お互いに相手が何者なのかを理解しやすい。また、自主管理のため掃除などで定期的に顔を合わせる機会も多い。掃除や作業、マルシェなど住人が参加するイベントは多いが、ここには作業や交流を希望する人たちが集まっている。

「暮らし始めて本当に、顔色がぜんぜん変わったよね」と藤沢さんが言うと、

「入居前は仕事と家の往復だけで、これからどうしようと煮詰まっていたのかもしれない。ここに入って、ご近所さんがたくさんできて、寂しくなくなっちゃいましたね。自分の生き方も変わって、本当によかったなと思います」と笑う朋子さん。

ひとつの建物を媒介に入居者それぞれが役割を持ち、同じ目的のために協働する。一見すると負担に感じそうな関わりの多さが、逆に密度の高いコミュニティを生んでいるのだろう。



マルシェの様子。店舗がすべてオープンし、近隣の人が集まる



一緒に食事をとり、みんなで子育てをして、困った人がいればみんなのお金をその人のために使う。家族ならば当たり前のことだが、血がつながっていなかったらどうだろう？

拡張家族というコンセプトを打ち出しているCift(シフト)は、「共に暮らし、共に働く」という価値観に共感するメンバーが集まり、共同生活を送っている。彼らに血縁関係はない。しかし自分たちを「家族」と呼び、あらゆるものを共有しながら生活をしている集団だ。

東急電鉄による渋谷の大開発の一環で2017年に誕生した複合ビル「渋谷キャスト」。Ciftはこの13階にある。ラウンジやキッチンなどの広々とした共用部と、19室の個室からなる専有部で構成される。渋谷駅徒歩1分で、個室の賃料は坪単価1.7万円。ハード面でみると非常に利便性の高い高級賃貸住宅である。

しかし冒頭にも述べたように、ここは単なる賃貸住宅ではない。このプロジェクトに企画段階からコンサルタントとして関わっていたのが、Ciftの発起人でありコンセプトの藤代健介さん。

「もともと渋谷という土地柄『クリエイターが集まる住宅』を企画していました。クリエイターの定義は自分の人生をアップデートし続けている人。つまり、このテーマは『自己変容』なんです。

挑戦するのは『孤立化』という社会課題。自分のものを自分だけで独占することの連鎖によって、結果的に一人ぼっちになっている世の中で、それとは逆の暮らしをすることで孤立化に立ち向かい、ひいては世界平和を実現したい。Ciftはそんなことを目指している社会実験の場です」。

Ciftの共用ラウンジ、キッチンで食事をしながら談笑する藤代さん(奥)、正紀さん(手前左)、外山さん(手前右)



Ciftのしくみ

このメンバーは、「拡張家族」というコンセプトに共感した上で参画している。新しいメンバーを迎えるのは紹介制で、紹介者は自分が家族として一緒に暮らしたい人を紹介する。面談もするが、1回面接したぐらいでは人となりまでは分からない。そんな時は、家族である他のメンバーが「この人と家族として暮らしたい」というのを信じて受け入れるのだそうだ。

「Ciftは、人の内側にある『人を信じたい、信じ合いたい』という前提を持ち寄ったコミュニティです。一般的な不動産は、立地、賃料、築年数などの外的要因で選択されますが、Ciftを選ぶモチベーションは『価値観への共感』という内的なもの。血縁関係がない人たちが、お互いを『家族』と捉えるだけで一緒に暮らしていけるのかという挑戦なんです」(藤代さん)。

また運営面ではCiftは法人組織でもあり、メンバーは組合費を支払っている。組合費の使い方ははじめ、Ciftとして意思決定をすることは、定期的に行われる家族会議で全員で決めているようだ。

Ciftでの暮らしは「人生のシェア」

立ち上げ当時は40名ほどだったメンバーも今では80名近くになり、拠点も4箇

所に増えた。ここで生活する人の約8割がフリーランス。また他にも家を持ち、他拠点で暮らしている人も多いという。ここまで話を聞いていても、一般的なシェアハウスや、先に取材したソーシャルアパートメントとはだいぶ趣が違っていることがよく分かる。

「Ciftで人生がガラッと変わった人も多と思いますよ。人と人との出会い、しかも深い出会いだからこそ影響も大きい。人生が変わる場だと思う」(藤代さん)。

このメンバーが共有をしているのは、物理的な空間ではなく価値観。価値観を共有するコミュニティではどんな交流が起きているのだろうか。ちょうどその時、ラウンジにいたメンバーの二人にも話を聞くことができた。

工藤正紀さんの場合：

「人生変わったランキング、高いよね(笑)」と藤代さんに紹介された正紀さん。

鍼灸師であり映像制作なども行う彼は、鍼灸の師匠がCiftメンバーだったことをきっかけに仲間に入った。正紀さんは、Ciftで暮らし他のメンバーと触れ合う中で、自分の将来のビジョンが明確になってきたそうだ。

「日常的に一緒に食事をしたり、会話をしているうちに、みんな忙しく疲れているのを目にしました。みんなと生活をする中で、

自分の仕事について『鍼灸で治す』という考えから、もっと広い視点で『みんなを健康にしたい』という考えに変わってきました。その人がずっと健康でいられるためにはどうしたらいいのだろうか。個人が健康になって、コミュニティが健康になったら、その先は日本、世界へと広がっていくかもしれない。施術者と患者以上の関係性で相手のことが見えてきたことで、自分の考えが変わったのは大きいですね。

考えの変化にともなって、仕事でもセルフケアグッズを作るなど治療以外の新しい挑戦を始めているようだ。Ciftのメンバーになって2年ほど。ここで知り合ったメンバー数人と一緒に借りた家が三浦にもあり、仕事の7〜8割をCiftメンバーと行っている。正紀さんにとって、公私ともにCiftが生活の中心となっていた。

外山雄太さんの場合：

「僕は同性愛者で、結婚や子育てという選択肢は、今の日本で現実的ではないと思っていました」と、落ち着いたトーンで話す外山さん。ご自分は結婚や子育てはイメージしていなかったが、相手が結婚しても続いていこうという友達を『緩やかな家族』と呼んでいたようだ。

「家族ってなんだろう？っていうのに興味があって。そんな中で、藤代さんの説明会を聞いて『これは自分が入る場所だ!』とピンとききました。

Ciftに入ってから、子育て中の家族と暮らし、旅行にも行き、無縁だと思っていた子育て経験を得ることができました。それによって、東京で子育てをする親たちがいかに息苦しいかなんかも見えてきて…社会の見え方が変わった部分がありますね。振り返ると、自分の感覚器官を広げていく訓練のような経験でした」。

ここでの暮らしについて「Ciftのメンバーとは、『人生をシェア』している感覚がありますね。頼もしい親族が増えたような感じ。」と外山さんが言うと、

「たしかに、実家族より頼れるなという感覚はありますね」と正紀さん。

「ここは例えるならば『道場』ですね」と



ローラさんの個室寝室(左)とリビング(右)

藤代さんはこの場所を説明する。人が好きだから、楽しいから一緒に住むのではなく、ここで様々な価値観を吸収し、自分の生き方を変えていく場所。「自己変容」という当初のコンセプトを二人ともまさに自然と体現していた。

Ciftで起きていること

Ciftを訪問して驚いたことがいくつかある。まず多くの個室には鍵がかかっている。藤代さんに理由を尋ねると「逆になんで鍵をかけるの?」と返されてしまった。

取材時に各個室を案内してもらったが、チャイムは鳴らさず、玄関扉を開けて「誰かいる〜?」と声をかけながら藤代さんはどンドン中に入っていた。誰かいたら近況を話し合い、いなければそのまま扉を閉める。迎える入居者側も「久しぶり、元氣?」と、急に訪ねてきたことを気にする様子はない。案内してもらった6室は、なんとすべて鍵が開いていた(!)。

さらに各個室もCiftメンバーやメンバー以外の人で共有されていた。ある個室は、一部が会議室として誰もが使えるように開放されている。また別の個室では、住人の友達が料理をしていたり、寝ていたり (!!)と、各個室も驚くほど開かれている。

Ciftで唯一の防音室に住む横浜ローラさんのお部屋を訪ねた。歌手である彼女は弾き語りで全国を飛び回る。各地には泊めてもらえる家族のような友人がいるようだ。その友人たちが東京にきたときに泊めてあげたいという理由でCiftに興味を持った。

「私は結婚していないし、子どももたぶん産まないと思うのだけど、結婚してもすごく小さな2人だけの家族として生きるの

かなと漠然と考えていました。そんなときCiftを知って、実験かもしれないけど、ここならみんなで家族として生きていけるし、私が家族と思っている全国のみんなも『おかえり!』と言って迎えてあげられるなって」とCiftに入ったきっかけを話してくれたローラさん。

「最近SNSで匿名で文句を言ったりする人もいるけど、そういう小さなことをみんなが許すことができれば、争いや戦争も起きないはず。ここでは誰かを嫌いと、派閥も全くない。ここで暮らして私自身も、イヤな気持ちを捨てられるようになったんです。こういう生き方が自分にとって幸せだし、世界もそうなればいいと思います」(ローラさん)。

オープンでポジティブな空気

Ciftでは「家族」という前提のもと、自分の空間や時間だけでなく、考えや経験まであらゆるものが共有されている。そして、共有することでお互いの人生に影響を与え合い、頼り頼られる関係が生まれているのを目の当たりにした。「家族がたくさんいる安心感」をお互いに感じていて、それが自分の人生にとっていかに大切かをそれぞれの言葉で語る姿も印象的だった。

取材前、「拡張家族」という尖ったコンセプトに私は少し構えていた。どんな人たちが迎えてくれるのだろうと。しかし実際に訪問してみると、そこに漂うオープンでポジティブな空気感が印象的で、もっと彼らと話をしてみたいと思った。定型ではないけど、しなやかで寛容なコミュニティ。この実験の先には「孤立化」に立ち向かうヒントがある、そんな可能性を感じさせる場だった。



a summary

したい暮らしをかなえ、縁をつなぐ 彼・彼女たちの幸福な暮らし方

今回の取材は、インタビューから住まいや環境へのポジティブな気持ちが強く伝わってきて、取材する側としても非常に楽しいものだった。考察の前に住まいの現状を簡単に振り返ると、1960年代～70年代以降、核家族化が進み、血縁や地縁をはじめとする社会的なつながりが時代とともに少なくなった。さらには外部と遮断されたマンションに单身もしくは核家族で暮らす世帯も増加。隣近所の顔も分からず交流もない、そんな状態が当たり前になっていたが、東日本大震災をきっかけに、人とつながりたい、絆を大切にしたいという風潮が生まれてきた。家族や友人、地域の人とのつながりを再び見つめ直し、それらを大切にしようという方向にみんながシフトし始めた。住宅や街づくりにおいてもコミュニティやコミュニケーションの大切さが見直され、それまでの分断されていた状態から反対のベクトルに向かっている。

幸せな暮らしの土台にある 「つながり」

今回取材に行った物件はすべて、人と人のつながりが発生している場所だった。個々の暮らしのエピソードの合間に、隣近の人や大家さんについての話題が自然と上がってきたことからそのことがうかが

える。何人かのインタビューからは、以前暮らしていた一般的なワンルーム賃貸について「同じ建物に住んでいる人の顔も見えず不安だった」「狭い空間に一人でいるのは孤独」というコメントがあった。一方で現在の住まいは、近所の人との顔が分かり、顔を合わせれば挨拶をし、また何かあったら助け合える関係性に安心感を抱いていた。満足度を高めた理由のひとつに、隣近とのコミュニケーションがあることは間違いなさだろう。

住人コミュニティを活性化させる具体的な仕掛けについては、後ほど細かく見ていくが、まず考えたいのは最後に紹介したCiftだ。ここは根本的な部分で、他の賃貸住宅コミュニティと違って思うように見られるような共用ラウンジやSNSグループはここにもあるが、それらでCiftのコミュニティを説明することは不可能である。

特筆すべきはCiftの住人が自分たちを「拡張家族」と宣言している点だ。ここでは、自らが選んだ「家族」という関係性に対して、個人がすべてを開いている。プライベート空間の鍵を開き、相談を持ちかけられればいつでも時間を取る。人格を開き、他者と人生をシェアし、自己を変容させるという、他の事例とは全くレベルの違うつながり方をしている。そして住人から出た「頼れる親族」という言葉にも注目

したい。他の事例が隣近との関係性を「安心感」と話すのに対して、Ciftの住人が言う「頼れる」という言葉は、互いへの強い信頼を感じさせる。思想を同じくする人々による、セーフティネット以上の、一歩踏み込んだコミュニティが築かれていることが印象的だった。

つながりを生む、 開き方のバリエーション

Ciftの実験の先に可能性を感じる反面、「他者と人生をシェアする」という行動は、住まいの文脈で考えるとかなり特殊な例だろう。自分をすべて開き共有する関係よりは、自分の生活または時間の一部分を共有する程度が、一般的な解だと思われる。ただし、そのためには「共用部をつくる」という単一の施策だけが答えではなさそうだ。具体的にどんな方法が取れるのか、取材した他の5物件を振り返りながら具体的に考えてみたい。

あかぎハイツは、もともとは一般的な賃貸住宅だったが、「楽しんで暮らしてもらいたい」という意向から、原状回復を不要とし、入居者が部屋にかなり自由に手を加えられるようルールをゆるくした。DIYが得意なオーナーが住人を手伝うこともしている。また、玄関を飾りつけたり、剪



定した植物をおすそ分けしたりという行動から分かるように、ここは何よりもオーナー自身が開いている。オーナーを媒介にしたつながりが生まれた結果、住人に「受け入れられている」「何かあったら相談ができる」という安心感が醸成されていた。

カマタブリッチや**ソーシャルアパートメント**（ワールドネイバース護国寺）には、物件のコンセプトとなる共用スペースが存在する。ソーシャルアパートメントの場合は、一般的なワンルームマンションでは望むべくもない贅沢なキッチン、リビング、屋上などの共用スペースの豊かさが、自然と住人を個室から誘い出し、交流のきっかけをつくっている。カマタブリッチはクリエイターのサポートが受けられる工房が住人たちのづくりのまちに開かれ、入居者同士だけでなく、入居者と街をつなぐ場になっている。一方でどちらとも、交流の場である開かれた共用部に対して、個室はきちんと閉じられている。必要な時に人と交流し一緒に趣味を楽しむこともできるが、プライバシーはしっかりと確保できる。交流をしたくない時には一人でいられる気楽さもある。個人に選択を委ねる、メリハリのある仕掛けだろう。

ネコ共生住宅の**せいらんアパートメント**では、オンラインを通じたコミュニティが存在した。共通の趣味であるネコを媒介に、悩みを相談したり、世話を頼み合った

りしている。今回取材した物件の中では、物理的に共有しているものが一番少ない。しかし「ネコ好きに悪い人はいない」ということなのか、ネコの世話のためには鍵を預け合うほどの信頼関係が築かれていた。共通の趣味が他人への信頼感を高め、通常の近所付き合い以上に心を開かせるのかもしれない。

対して**樺の音terrace**は、つながりの仕掛けが一番多い例である。住人誰もが使える共用部があることに加えて、自宅の一部は住人や街へと開かれた店舗スペースになっている。また物件管理のための作業など、休日の時間さえ費やす必要がある。さらに言えば、店先やディスプレイは自分を表現する場所。自分は何者なのかまで近隣住人に開示するという、つながりを生む仕掛けが多層的にできている。この状況は人によっては負担に感じるかもしれないが、同じ目的を持つ者同士、共有するものが多い分つながりも強く、互いを大切に気遣い合う関係性が築かれていた。

孤立を回避する 縁のデザイン

各物件に盛り込まれたつながる仕掛けは、「共用部をつくる」以外にも様々な方法がとられ、その開かれ方にはグラデーションがあった。常時使える共用部がな

くとも、大家さんの姿勢一つで開かれた事例もあれば、共通の趣味をフックにSNSで住人同士がつながる例もある。また、共用部があっても、ハコを作るだけでは交流が生まれるとは言い難い。ワークショップやカジュアルな飲み会のように、機会があることで交流が生まれ、その結果、挨拶をしたりちょっとした会話する関係性に発展している。

このようなつながりについて、書籍『多層社会』（篠原聡子他、東洋経済新報社）で分かりやすく整理されている。本書では、血縁や地縁が薄くなった現代において、旧来の関係性に代わって新しく自らが選んだつながり＝「縁」を結びながら暮らす人たちの事例が紹介されている。「遠くの親戚より近くの他人」と言うが、助け合うのは家族親族に限る必要はない。またそれにともない、家の形も、これまでの価値観にこだわる必要はない。結びたい縁に合わせて、ハードもソフトも新しく捉え直していこう、というのが本書の主張だ。

先ほど振り返った事例は、まさにこの「縁のデザイン」という考え方に当てはまるだろう。ネコ好きのためのネコ縁、大家が媒介となるDIY縁、生活圏内に知り合いの家や店がある地域縁、同じ物件で店舗を営むナリワイ縁…。新しい世界にハシゴをかけるように自分の興味に合わせて

a summary



て縁を選択し、他者とつながっていく。仕事と家の往復だけでは、無意識のうちにゆるやかに孤立していく可能性のある現代。自分で積極的に縁をデザインすることは、孤独に陥らない基盤を自ら構築することなのだ。

一つ強調しておきたいのは、今回見てきた物件では、つながりをつくる以前に、入居者はそこに暮らすことで、自分の生活をより充実させることもこなしているという点だ。自分が心地がよいと感じる内装だったり、趣味をより楽しめたりというように、主体的に暮らしを楽しむための要素が、押し付けでなく盛り込まれている。各事例からは、個人がしたい暮らしをかなえる仕掛けがあり、充実した暮らしそのものが他者との縁を結び、コミュニティを育むきっかけになるという多重構造を読み解くことができる。

「したい暮らし」が賃貸でも選べたら

冒頭であげた単身世帯の暮らしへの問題意識。「暮らしを楽しむことがない」と「孤立化」について、取材を通してその双方を解消するヒントが見えてきたように思う。

キャンドルやポスターを飾るといったインテリアに力を入れることだけが暮らしの充実ではない。料理好きが料理をおもいっ

きり楽しめるキッチンを備える物件を選ぶ、家族同然のペットにも快適な物件に住む、というように、個人のしたい暮らしを実現できる仕掛けが賃貸住宅の中に入っていると、仕事や遊びに忙しい単身世帯でも、主体的な動きを取りやすくなるのではないだろうか。それに加えてつながる仕掛けを織り交ぜることで、顔を合わせたり、挨拶をしたりというささやかな交流が生まれてくる。その先には、相手の気配からお互いを気遣い合ったり、何かあったら相談できるという安心感、ひいては居場所感も芽生えてくるかもしれない。そんな小さな要素が身の回りにいくつもあることが「幸福な住まい」を構成していくのだと感じている。

この原稿を書いている今（2020年3月現在）、新型コロナウイルスが大流行している。大規模なイベントは軒並み中止となり、公立の小中高校は休校、仕事も会社によっては自宅勤務となっている。私自身リモートワークが増えて気がついたが、ひとり暮らしで自宅勤務をしていると本当に人と話さない。もちろんオンラインでやり取りをするが、熱量や感情は伝わりにくく、交流している感覚はリアルと比べるとやはり小さい。気持ちが内向き、なんとも言えない虚しさや心許なさが積み重なる。

この状況になり、私は改めて「縁のデザイン」の必要性を感じている。今の住ま

いには非常に満足しているが、ビルパオで見た風景のように日常的に気軽な交流が望める環境ではない。この状況を変える第一歩は、自分も含めて、個人が少しずつ開いていくことだろう。自分を開き、自らの興味に合わせて縁を結んでいく。したい暮らしに合わなければ、家を変えたって良い。住まいは、その時の状況に一番しっくりくるものを選び取ればいいのだ。何を選んだらいいかわからない時は、今回取材した事例を含めて、他の楽しんでいる人の暮らし方を参考にしてもらえたらと思う。一人一人が、自分にとっての幸せにもう一歩貪欲になった先に、もっと安心感を持って暮らせる社会が広がっていくのではないだろうか。

PROFILE

及川静香（おいかわ・しずか）：映画の宣伝、英会話スクール等の業務経験を経て、2011年に三菱地所が運営するベンチャー支援施設「EGG JAPAN」に参画。広報およびイベントの企画運営に従事。その後「ライフ」と「ワーク」を近づけたい想いで、リノベーションを手がける設計事務所ブルースタジオに入社。同社を退職後、80歳まで働くことを見据えてキャリアを再考。人材育成系ベンチャー企業で働きながら、アートやデザイン関連のプロジェクトにフリーランスとして携わる。



インタビュー@高円寺アパートメント

大家のプロ

青木純氏が見たひと・いえ・まち

～ご機嫌なひとり暮らしをする方法～



「ひとり暮らしをする人の幸福度が低い」—『住宅幸福論Episode1・2』を通して見えてきたこの問題。日本の単身世帯数はこれからも増えてゆくという状況下で不吉な考えが頭をよぎる—結局、日本に暮らすことは不幸なのだろうか—。そこで、カスタマイズ賃貸住宅「ロイヤルアネックス」で賃貸住宅業界に革新をもたらし、最近ではまちづくりにかかわるプロジェクトも進行中の青木純さんに“ひとり暮らしの日常は楽しくなるのか”をテーマに話を聞いた。快晴の清々しい日、高円寺アパートメントで“ご機嫌な対談”が始まった。



愛ある大家 ▶ 青木 純（あおき・じゅん）1975年東京都生まれ。株式会社まめくらし代表取締役。不動産サイト「HOME'S」で中古流通事業に携わったのち、家業の不動産賃貸業を継いで二代目大家になったのが2011年。空室率25%超の賃貸住宅「ロイヤルアネックス」をカスタマイズDIY賃貸という画期的な手法で再生させた。「リノベーションスクール」や「大家の学校」の校長など活動は多岐にわたる。現在は南池袋公園や池袋駅前のグリーン大通りをメイン会場にした『IKEBUKURO LIVING LOOP』を企画・運営する(株)nestの代表も務めるなど、その活動は賃貸住宅だけにとどまらず、公共空間やまちづくりにまで発展している。



聞き手 ▶ 鳥原万丈（しまはら・まんじょう）株式会社LIFULL・LIFULL HOME'S 総研所長 1989年(株)リクルート入社。2005年よりリクルート住宅総研にて住宅関連の調査データ分析等に携わる。同社を退社後(株)ネクスト HOME'S 総研(現・(株)LIFULL・LIFULL HOME'S 総研)所長に就任。一般社団法人リノベーション協議会設立発起人。リノベーション業界にも深く関わるゆえ青木純氏とも旧知の仲。



女将 ▶ 宮田サラ（みやた・さら）「まめくらし研究所」店長を務めながら店舗奥の住居スペースに暮らし、実際に「商い×住まい」を実践。高円寺アパートメントのコミュニティマネージャーとして住人同士、住人と地域の人々をつなぐイベントなどを企画・運営する宮田さんは、まさしく女将！

対談場所はここ!

高円寺アパートメント

JR中央線・高円寺駅と阿佐ヶ谷駅のちょうど真ん中あたり。JR東日本の社宅を(株)ジェイアール東日本都市開発がリノベーション。青木さんが代表を務める(株)まめくらしが運営を担い、暮らしと街をつなぐ集合住宅と生まれ変わった。「暮らしを楽しむアパートメント」のコンセプト通り、通常の住居のほか「住宅兼ショップ」「住宅兼アトリエ」といった物件も用意され、まさしく「楽しいこと」が交わる賃貸住宅。



① 高円寺駅から阿佐ヶ谷方面へ、スナックや町中華など昭和感が漂うディープな高架下を歩くこと7分。パッと視界がひらけた先に緑の芝生と5階建ての高円寺アパートメントが。平日昼間でも人々が集う清々しい空気感に、地上の世界に引き戻された安心感が半端ない。

② 街に開かれた1階部分には、カレーが美味しいクラフトビール店やフルーツサンドが人気で行列のできる焙煎コーヒー屋さんなどの飲食店が入る他、宮田さんが店長を務める「まめくら

し研究所」などショップもある。③ 寝そべてお昼寝できる芝生広場あり、住人が営む小さなショップあり。

島原万丈(以下、島原): 今回のレポートではひとり暮らしをテーマに研究を進めています。これまでの「住宅幸福論」の調査でも、単身世帯の幸福度・住生活の満足度が低いという結果が出ていまして、そこに問題意識を持っています。リノベーションスクールから最近では公民連携のまちづくりまで手掛けているかわら、大家の学校を主催する中で様々な大家や住人を見てきた青木さんですが、ひとり暮らしの幸福度が低い問題に対して、どのように考えますか?

青木純(以下、青木): まず大切なのは「一人なんだけど独りじゃないという世界観」を作っていくことだと感じています。共同住宅、一軒家にかかわらず、社会とつながっている安心感はとても大事な気がしています。今回の新型コロナウイルスの問題^{*1}もそうですが、社会と断絶された状態のときに「家=社会」という状態がすごく幸せなことだと再認識しました。ここ(高円寺アパートメント)はひとつの「社会」になっているので、住人同士の交流は生活する上で普通に発生しているし、わざわざどこかに出かけなくても部屋を一步出るとそこにコモンスペースやコミュニティが存在しているので孤立しないで済みます。

島原: ここは1階に店舗、中にも住人の共有スペースがある開かれた構造なので分かりやすいですね。ただ、ロイヤルアネックス^{*2}の場合は、

豊かな共用スペースが最初からあったわけではないですね。もともと、日本の賃貸住宅はそういうふうには作られていないことが多いです。

青木: ロイヤルアネックスでは、全部を賃貸の部屋にしないで一室をコミュニティリビングにしました。一見、家賃を生み出さないスペースと捉えがちですが、そこがあることによって住人同士の交流が生まれて、住人がその場所に価値を見出してくれたんです。そうするとすぐに他所に引っ越さなくなる。また、青豆ハウス^{*3}は家族向けの共同住宅なので、子供が成長して結構手狭になってきました。多くの家庭の共通課題を解決するために一部屋をみんなの子供部屋にしようという構想もあります。

島原: もともとないのであれば、作り出せばいいというわけですね。

青木: ひとつの余白スペースを触媒にして、みんながつながれる場所を作っていけばいいのではないのでしょうか。あるいは空間ですべてを解決しなくても、この高円寺アパートメントがそうであるように、「女将」という存在がひとりいることで、組織がうまく動けることもあります。

島原: つまり、コミュニティマネージャーですね。

青木: 分譲マンションでは、全員が同じ持ち分で同じ責任やローンを抱えているから、管理組合も当事者すぎてギスギスしてしまう。比べて、賃貸住宅のよさというのは、住人の負担も軽いことです。大家やコミュニティマネージャーの

ような立場で、かき混ぜてあげる人間がいるとうまく回る気がします。

島原: 大家が女将の立場になることもあるのですね。大家の学校^{*4}に参加するような大家さんは意識が高い人が多いと思われるのですが、彼らの悩みや課題はどうか。

青木: まず、問題は住人を知らないということでしょう。ほとんどの賃貸契約の場合、大家自身が住人と相対して入居を申し込んでいるわけではなく管理会社任せなので、入居者の人柄を知らない。住人の個性を知らないでコミュニケーションが取れない。本当に小さな挨拶からでも、コミュニケーションを取ることで変わることはあるはずです。あと、ロイヤルアネックスの時は、もともと住んでいる住人がいる中で新たな住民向けにカスタマイズ賃貸という新しいサービスを展開したのですが、それを面白がる新しい住人と、以前から住んでいる住人をつなげることで、すごくよい雰囲気生まれました。

島原: もともと住んでいる人にも影響があったということですか。

青木: ええ。隣に越してきた人が明るくておすそわけしてくれたとか、エレベーターの中で挨拶したとか、それだけで場所に対して存在意義を感じるんです。夫婦二人で孤立していた世帯も、他の住人と一緒に飲みに行ったりしているのを見ると、中だけで閉じないことの大切さが見えてきました。

@ 高円寺アパートメント

島原:まさしく、それがひとり暮らしでも幸福度を上げるポイントにつながりそうです。

青木:社会を小さくしないことです。ここ(高円寺アパートメント)の場合は1階スペースに飲食店などがあるのでどんどん人が入ってきます。外から来る人と中に住んでいる人が適度に混じり合う雰囲気と、その風通しのよさは感じられるでしょう? あと、面白い例があって、首藤くんという若者が運営している「はっぴーの家」という介護付き

シェアハウス^{※5}、1階のラウンジは誰でも入っていいという場所になっている。本来はセキュリティが厳しくて一番閉じている場所ですよ。家族しか来ないような場所なのに、近くに住んでいる人たちが普通に公園のように遊びに来たりしてます。

島原:遠くの親戚より近くの他人状態ですね(笑)。

青木:子供たちが学校

の帰りに遊びに来てはテレビゲームをやっているのを、老人がただ見ているだけなんですけど(笑)。老人にしてみたらその状況は苦でもなんでもない。たまに言葉が交わされて老化防止に役立っているのかもしれない。「老人は言葉がゆっくりなので日本語の勉強になる」といって、外国人ツーリストが働き始めたことでもあります。やはり適度に変化の起こる状況は大切だし、刺激的な状況を作り続ける

ことで、そこにいる人の満足度は変わってくるんじゃないかと感じます。

島原:変化を起こすということですね。実際にこの高円寺アパートメントの女将として、宮田さんが感じる変化はありますか?

宮田サラ(以下、宮田):共用部が充実していてコミュニティを推進する住宅だと言ったところで、日本人ってまず一步を踏み出しにくいと思うんです。だから、まずは最初に私が旗を振っ

では、日本の賃貸住宅でひとり暮らしをしている人が選ぶのは「便利なところ」で「家賃が手ごろなところ」。家では「静かに過ごして誰とも交流したくない」といった意見が見られます。プライバシーが大事であると。そうすると、青木さんや宮田さんが変化を起こしてあげるといようなことを望まない人もいるのかと思います。

青木:確かに、いると思いますよ。

島原:そのへんはどうなんでしょう? そういう人は放っておくのがいいのでしょうか。

青木:簡単に言えば放っておく、ですけど、そういう人たちが参加するチャンスを残すという意味で、「求めないこと」が大事なんだと思うんです。こっちが「楽しいよ、一緒にやろうよ」と言ってもどんどん嫌気がさすだろうから、近くでなんとなくいい状況を作っているこ

と。すると、どこかで参加できるタイミングがあると思うんですよ。だから、「待ってるよ」というメッセージを送り続けることは大切ですね。

島原:タイミングが合えばどうぞ、くらいがちょうどいいんですね。

青木:ええ。これってお風呂と一緒にだと思うんです。ぬるま湯のお風呂って誰でも入りやすいでしょ。熱いとすぐ出なきゃいけないし、冷たいと入ってられない。ずーっと腰かけてる



対談は高円寺アパートメントの1階にある「まめくらし研究所」の奥にある一室で。

てイベントを企画したりして、住人さん同士をつなげることを心がけました^{※6}。「こんなふうに使え場所なんだよ」ということを示したかったんです。いまでは住人が主体となってスペースの使い方のアイデアを出してくれたり、住人同士でご飯を食べていたりとか、各々でつながりが生まれています。女将が最初にやってみせること、そこが大切だと感じています。

島原:旗振り役ですね。ただ、アンケート調査

※1:対談が行われたのは2020年3月上旬。新型コロナウイルス感染症対策本部によるスポーツ・文化イベントの開催自粛の要請があったのが2月26日で、デマに踊らされたトイレトペーパーの買い占めがあったりと不穏なムードが漂い始めた頃だった。

※2:2011年、祖父の代から続く大家業を青木さんが継いだのがロイヤルアネックス。空き部屋率25%の中古マンションを居住者が部屋の壁紙や床材などを自由に選べる「カスタマイズ賃貸」という画期的な賃貸の形を創造することで、入居待ち状態の人気物件となり、話題になった。

※3:2014年3月に竣工。「育つ賃貸住宅」がコンセプトの家族向け共同住宅。8戸のコンパクトさにシェアハウスのようなコミュニケーションが生まれる設計、入居前から住民同士や地域の人たちとつながるイベントなどを開催した。2014年グッドデザイン賞を受賞。

※4:「愛ある大家」を生み出すためのビジネススクール。賃貸住宅経営者だけでなく、暮らしの場作りにかかわる全ての人に門戸を開いている。現在、7期開催中。

※5:はっぴーの家ろっけん。神戸市長田区の商店街の一角にある介護付きシェアハウス。代表の首藤義敬氏もこのハウスで暮らしているという。

※6:女将として暮らし始めて最初に企画したのが住人同士の交流イベント「同じ釜の飯を食べようの会」。次に芝生広場で開いた「おひろめマルシェ」(2017年)は地域に開いたイベント。多くの人を訪れ、まさしく高円寺アパートメントのお披露目に。

うちに、そろそろ入ってみようかな、みたいな。

島原：一方でコミュニティというものは、その境界線を引くことによって成立するという側面があります。それが活発なコミュニティであるほど、外から入るにはハードルがあるように感じます。一種の排他性というか、すごく仲のいいシェアハウスみたいな。青木さんは非常に仲のいいコミュニティを作りながら、かつ、広く「待ってるよ」というメッセージを発信しています。宮田さんから見て、青木さんやその他の「愛ある大家さん」はどう映っていますか。

宮田：青木さんに限って言うと、青木純というキャラクターが確立しているので、最初はそこに集まる人もいます。でも、だんだん親しくなってくると青木さんにツッコミを入れられるような人が現れる。するとそこから第二層として、その住人に集まってくる人が出てくるんですよ。ちょっとずつ階層ができて、そこからグラデーションが生まれているのだと思います。

大家の個性が孤独を救う

島原：日本の賃貸住宅業界はいわゆるマーケティングを忠実にやればやるほど状況を悪くし



毎日のように顔を合わせること近所さんと立ち話は日常の風景。野球話が盛り上がるのも日常。



インタビューは3月初旬。新型コロナウイルス感染拡大が起り始めた頃で、給食中止で余ったジャガイモが大量に仕入れられてクラフトビール店で売られていた。

ているのではないかという気がしているんです。家はいわば寝に帰るだけの場所だから、プライバシーと利便性があればいいと。プライベートではあまり他人とお付き合いする気がないという意見を持っていて、その通りの生活をできているわけです。ただ、そこに寂しさはないのかなと考えてしまいます。

青木：結局、そういう人たちは、「家」ではなく単なる「寝床」に住んでいるという感覚なんですよ。仏生山の岡さん^{*7}がロイヤルアネックスに来たときに、「青木さんがやっているプロジェクトって“家感”があるよね」って言われたんですよ。

島原：家感とは？もう少し聞かせてください。

青木：共同住宅だったとしてもただの「部屋」じゃなくて、もう少し家族とか人とのつながりが見えるような、「家」のような感覚がある部屋と言えいいかな。例えば、本人不在の時でもまるでその人がいるかのような感覚があったり、部屋に入った瞬間から持ち主のイメージが湧いたり。部屋が人格化している状態でしょうか。

島原：なるほど。それは『Episode2』で日本人とデンマーク人の暮らし方を調査した際、すごく大きな差として出てきたところです。デンマーク人は家が大好きで幸福度も高い。あなたにとって家とはなんですか？と聞くと「アイデンティティです」「自己紹介です」という答えが返ってきたのが印象的でした。家に対して主体的で、少しでも良い空間にしようとしている。日本人にはそういう感覚が少なく、ただ条件のいいものを買おうとしているという傾向が強かったですね。なかでも特に住空間に対して意識が低いのがひとり暮らしなんですよ。みんな同じような間取りで、自由に部屋をいじることもできない。つまり、それは部屋が人格化していない状態だということだったんですね。

青木：日本のひとり暮らしの部屋は個性も発揮しづらいでしょうね。すべてコンパクトにまとまってベッドを置いたら終わり。しかも人を招きづらいように思います。

島原：確かに、日本とデンマークでは人を招く回数が大きく違っていました。日本の賃貸住宅・ひとり暮らしというのは人を招く機会が少



対談場所となったのは、ハンドメイド雑貨がギャラリーのように並ぶショップ「まめくらし研究所」。

ない。結果的にアイデンティティを表現する場所になどなり得ないという印象を受けました。例えば、ロイヤルアネックスは、最初にコミュニティを作るのではなく、まずは「壁紙を選ばせる」ところから始まりました。これはアイデンティティを表現することが目的だったのでしょうか。

青木：そうですね、まずは自己表現、アイデンティティを発揮してもらうことから始めてみたんです。部屋が人格化していることと、社会とつながっている感覚は並列ではないか、互いに支え合っている価値観じゃないかと考えていたんですよ。家で幸せじゃないと地域とつながろうという意識は、まず生まれません。

島原：そういう経験ができる賃貸住宅というのはまだまだ貴重で、それが普通になるべきなのでしょうが。

青木：そういう意味で、これからの賃貸住宅は大家さんの個性で豊かになっていく可能性も秘めていると思います。

島原：宮田さんの言う通り、最初は大家の個性に引き寄せられた住人の個性が、アメーバ的にどんどん広がっていく感じですよ。

青木：大家の個性や、趣味趣向に合う感覚の人たちが集まってくると思うんです。それが多様性であり、それぞれの個性にもつながってい

@ 高円寺アパートメント

る。つまり、住まいが人格化していくと幸福度が上がるだろうし、そうすると住宅スペック以上に大家さんの個性が大切になってくると思います。

島原: 大家が真っ先にマーケティングの対象にされているということですね。住人の自分らしさも大切だけど、大家も個性を自覚してほしいというのはその通りです。そうすると地域性もそこでは重要になってくるのではないのでしょうか。

青木: 地域とのかかわり合いも同様だと思います。特に、小さな街の飲食業では人と人の支え合いが大事になってきますよね。どんなときにも繁盛している多くは常連店で、顔の見える関係性ができていて、支え合いの文化が成立しています。住人と、その街で事業をやっている人たちのかかわり合いが深ければ深いほど、幸せな地域として残っていくし、その環境が人を幸せにしていけるのだと思います。

島原: 部屋の中だけではなく住んでいる地域に居場所があるか。街とつながりかかわりがあるかどうか重要になりますね。それでいうと、かなり衝撃的なデータがあるんです。自分の住んでいる街についての感じ方をアンケート調査したのですが、「自分は地域社会の一員と

して認められていないと思う」、「地域の中で自分だけ浮いている」、「自分にとってこの街は単に寝に帰るだけの場所にすぎない」という回答が約50%という、ショッキングな内容です^{※8}。

青木: 伸びしろしかないじゃないですか！

島原: ポジティブですね(笑)。「この地域から得るものは何もない」とか、「歴史文化には何の興味もない」といった割合が高くて、すごい数字でしょ。これが日本のひとり暮らしの実態です。

青木: 先ほどの「はっぴーの家」で衝撃的だったのが、2階にあるシェアスペースでお葬式をしていることです。入居していた老人が亡くなると地域の人たちがお葬式を執り行ってくれる。写真を飾って、寄せ書きして、幸せだったよって。しかも棺桶を子供たちがDIYで作っているんです。そこに暮らしているおじいちゃん、おばあちゃんたちは、死んでいくことが不幸なことじゃないと知っていて、むしろ幸せな最期を迎えて笑顔になれるわけです。最後は誰でも死んでいく訳だから、亡くなる時に不幸な世の中ではなくて、安心して死ぬ世の中の方が幸福度が高い気がします。ひとり暮らしの大半はこれから高齢者になっていく中で、その人たちが幸せにならないといけないという意識

はすごく持っています。

島原: では、どうすればこれから高齢化していくひとり暮らしの人たちが幸福になれるのでしょうか。

青木: 最近、生活協同組合みたいな仕組みを日本はもう少し意識したほうがいいと思っています。



店先でビールを飲みながらお店の人と談笑。毎日のコミュニケーションが当たり前のようにできる空間だ。



「デンマークでは賃貸住宅にも“家感”があったね」と、島原氏。

島原: 生活協同組合って、あの生協ですか？

青木: 現在の生協よりも狭い地域単位で、暮らしの生協みたいなのがたくさんできるのが理想です。つまり「小さな生協」ですね。コロナ騒動ではトイレトペーパーひとつなくなっただけで大騒ぎになったけれど、宮田さんは高円寺アパートメントの住民コミュニティに「トイレトペーパーがなかったらうちにあるからもらいに来てください」とお知らせしていて、みんなの不安を和らげてくれました。例えば生協の組合員の中で、誰かが確保してくれていると思えば、あんなふうには地域の全員が同じ店に詰めかけるようなことは起こらないわけです。つまり、都市部の生活圏と地方の生産拠点が小さくてもネットワーク化されていて、それが常につながっている状態である、これが小さな生協です。東日本大震災の時に感じたことですが、生産者につながっているとどんな状況下でもモノが入ってきて、不安を解消してくれるんです。「なんとかなるだろう」という気持ちになれる。

島原: その「なんとかなるだろう」というネット



写真手前の2店舗(自家焙煎珈琲店とカレー＆ビール店)はコミュニティハブ的な役割。

※7: 香川県高松市の郊外に2005年にできた仏生山温泉の「番台」を務める岡昇平氏。建築設計事務所と、仏生山温泉を運営しながら、まち全体を旅館に見立てる「仏生山まちぐるみ旅館」に取り組んでいる。

※8: 本報告書145p~147p参照。



ワークはこれからはもっと重要になるんじゃないでしょうか。

青木：ネットワークに参加するためには生協というシステムがあったほうが良いと最近では考えています。

島原：それは、現状の生協のように、会員費を払って維持するシステムですか？

青木：そうそう。だから管理費がある賃貸住宅が一番実現しやすいと思います。日常をきちんと管理するために払っているお金をストックして、いざという時に生産者からまとめて共同購入をするようなシステムですね。

島原：なるほど。シェアハウスでは比較的やりやすいかもしれないですね。

街との関係性を考える

島原：では、「街」だとどうでしょう。青木さんは、リノベーションスクール^{*9}でも全国のまちづくりにかかわっていますが、街という単位は賃貸住宅のコミュニティ以上に顔が見えない状態です。年齢や価値観もかなり幅が広くて実態がつかめない。リノベーションスクールも、コミュニティを意識せざるを得ない状況だと思いますが、実際に実案件として動き出した時に、つかみどころのない「街」とどう向き合っ

ているのでしょうか。

青木：その街で暮らす住人とのコミュニケーションを大事にするにはあるかもしれません。例えば祭りに参加するのもありだし、老舗店に顔を出してみたり、なるべく個人店で買い物をするのもひとつの方法です。要は顔を見せるということ。

島原：ひとり暮らしの孤独が住宅の問題だけではないと思うのは、彼らはこの地域から得るものは何もないなど、街に対して冷めたことを言っているからです。青木さんは、街にもすつと入り込んでいる気がして、どこが違うんだろうと。

青木：街の表面しか見ていないのが問題なのでしょう。その地域で暮らしている人とコミュニケーションをとると得るものはたくさんあります。昔の生活などもそこから見えてきますし、それを地域の個性として残したいと思うから、受け継げるものは受け継いでいこうという気になる。

島原：顔が見える大家さんには顔が見える住人が集まると思うのですが、顔が見えない街が増えてしまったというのがありますね。

青木：このように、住人が住みながら小商いをすることが増えてくるといいのかもしれない。街に店舗をいきなり出すのはハードルが高いの

で、店舗兼住宅といった、住まいのコミュニティの中で住んでいる人の個性が発揮される場所があればよいと思います。シェアキッチンはその代表格ですね。

島原：なるほど。賃貸住宅の中にシェアキッチンを入れて街の人も使えるというのいいかもしれません。

青木：いわゆる公民館的機能が街中にある状態が理想かもしれません。これから住宅も余る時代だし、いくつかを公共スペースに変えていくことで地域とのつながりを作ることできるんじゃないかな。

島原：ロイヤルアネックスのように、賃貸は全部を同じように貸すのではなく、一つをコミュニティリビングにすればいいという考え方がまさにハマりますよね。青木さんは、賃貸業からまちづくりまで活動の対象領域が広がっている中で、問題視していたり、反対に面白そうと感じている未来はありますか？

青木：一つは先ほどの「小さな生協」を作る活動をやりたいということ。教育や医療、これら生活全般の要素を掘り下げていきたいと考えています。特に地方都市では教育、医療の分野が大都市に比べると劣る部分が多いので、移住はしたけれど暮らし続けることができないという状況はよく聞く話です。

「居場所」が必要なわたしたち

島原：場所問題があるとなると、今回の新型コロナウイルス問題で強制的にリモートワークが進みました。組織の生産性に関する効果は問われるところですが、社員からすれば毎朝9時に満員電車に乗っての通勤は意味がなかったということに気づき、会社は都心のオフィス面積減らせると気づいて、トータルで見ればリモートの方が効率がよいという評価になるかもしれません。ただ、在宅ワークが進むと住む場所に滞在する時間がすごく長くなることになります。

青木：よりベネフィットが求められますね。

島原：単身世帯の、地域とのかかわりのなさ。ファミリー世帯でも他人とのつながりは、ほとんどが学校のママ友、パパ友が占める中、それ

@ 高円寺アパートメント

さえない単身者や子供のいない世帯というのは地域に対して手がかりがないという状態になります。せまいワンルームマンションでずっとリモートなんてしていると気が滅入るんじゃないかと思います。

青木:公園の機能がもっと必要ですね。いわゆる自治体の公園ではなく「公園的なコモンヤード」が各地域にたくさんあることが大切だと思っています。

島原:居心地がいい場所があることが大切ですよ。家は散らかっているわ、

街に出てもコンビニしか行くところがないわ、という状態では、会社に行った方がマシだとなりそうです。ネットの普及に伴って場所にこだわる必要がなくなるとはずっと言われ続けていて、初期の頃はノマドワーカー、最近ではリビングエニウェア(Living Anywhere)^{※10}だったり、アドレス(ADDRESS)^{※11}だったり代表例なのですが、要するに移動しながら暮らす定住しないライフスタイル

が目立っています。だけど、そうはいつでも結局行っ先のコミュニティや場所につながりがっているように見えるわけです。定住しない人たちにとっても、やはり人間には場所が必要なの感じます。

青木:必要でしょう。だから僕らは居場所、ネットワークを作ることを大事にしようと思っています。行き着くところは「ムラ(村)」だよと最近、思うんです。

島原:でも、不思議なもので、ムラ的なものが嫌

で僕らはそこから逃げてきたわけです。

青木:ムラのイメージは悪い(笑)。本来のムラの機能を果たすコミュニティとして再構築する必要のあるのかもしれない。

島原:それはさっきの小さな生協の構築にもつながっていますよね。

青木:ベネフィット、それぞれにメリットがないと人はつながらないです。

島原:東京大学の月先生^{※12}からお伺いした話ですが、阪神・淡路大震災の時は仮設住宅で



コミュニティから切り離されて孤独死をする高齢者が多かった。その教訓として、東日本大震災の仮設住宅地ではいろいろ対策が取られたわけですが、面白かったのは、ある団地で人の集まりを調査していたら、ランドリーに人が集まっていた。それもいくら声をかけても集会所やコミュニティセンターみたいな場所には出てこなかった高齢の男性たちが洗濯しに出てきて、待っている時間のうちにコミュニケーションが発生していたのだそうです。

青木:面白いですね。やはりコミュニティを前面に出されると、そこに入りたくない人が出てくるものです。コミュニティというものに価値を感じる人と、どうでもいいと思う人がいるわけであって。つまりは居場所、それぞれに居心地のいい場所があるかどうかです。

島原:それはベネフィットに基づいて、というわけですよ。

青木:そう。目的がある中で、結果としてそこにコミュニティが生まれているくらいがちょうどいいと思います。コミュニティはあくまで排他性の

一つなので、全員仲良くしようと言った時点で壊れるんです。自分に必要だと思った時だけそこに行けばいい。

島原:安直にコミュニティに入れればいいということではなく、コミュニケーションを目的とした活動より、ベネフィットに基づく活動が大事ということですよ。青木さんが目指す生協的なネットワークはまさにそれですね。

青木:ええ、生協的なつながりの中では、美味しい食材を手に入れられたり、手先の器用な人がいれば素敵なものを作ってもらえたり、一緒に作れる機会をもらえるのかもしれない。それぞれの「楽しい」をお互いしてくれる日常を作り出したいですね。

島原:生協的なつながり。今こそ大切だと思います。話も尽きないのですが、お隣のカレー屋さんでクラフトビールが飲みたいのでそろそろ(笑)。ありがとうございました。

※9:「リノベーションまちづくり」を担う人材育成を目的としたビジネススクール。2011年に北九州市から始まり全国に広がる民間主体の推進事業。青木さんは2013年から参画し、運営を担う(株)リノベリングのパートナー/アドバイザーとしても活動中。

※10: Living Anwhere。一般社団法人Living Anwhere(代表理事 孫 泰蔵)が推進する、様々なテクノロジーによって、水、電気、食料、通信、医療、教育、仕事など、人にとって必要不可欠なものが地球上どこにいても手に入る未来をめざし、自宅やオフィスに縛られないオフグリッドなライフスタイルを実践することを目的としたプロジェクト。

<https://livinganywhere.org>

※11: 地方の空き家や遊休別荘をリノベーションした物件のネットワークを持ち、月額4万円で全国住み放題になるサブスクリプションサービス。 <https://address.love/>

※12: 月先生・東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授。詳しくは『Sensuous City [官能都市] —— 身体で経験する都市; センシュアス・シティ・ランキング』122p 参照。

<https://www.homes.co.jp/souken/report/201509/> 月先生(2017)『町を住みこなす 超高齢社会の居場所づくり』岩波書店



孤独の群れに、
居場所はあるか？

石神夏希
劇作家



ぼくはひとりで部屋にいななければならない。
床の上に寝ていればベッドから落ちることがないように、
ひとりでいれば何事も起こらない。—フランツ・カフカ^{※1}

2018年、イギリスで「孤独担当大臣 (Minister for Loneliness)」が任命された、というニュースが世界を駆け巡った。英政府が2017年に行った調査によればイギリスでは900万人以上、人口の約14%の人が「常に(always)」または「しばしば(often)」孤独を感じており、その約3分の2が「生きづらさ」を抱えている、そして孤独が人々の健康を害し、国家経済に対して年間320億ポンド(約4.9兆円)の損失を与えている、という。

2018年4月25日付けの『TIME』電子版(<https://time.com/>)ではこのニュースと共に、日本の「孤独死」やアメリカ国民の3分の1以上が孤独を感じていることに触れ、今や孤独が全世界的な健康上の懸念事項となっている、と紹介している^{※2}。

世界一、孤独な社会

日本社会の孤独の現在はどうなのか。『東洋経済』2018年11月3日号の特集『「孤独」という病』は、以下のような実態を報告している。

- 日本の孤独死のうち、50代以下の現役世代が約4割、40代・50代が約3割を占める
- 日本は他国と比較してソーシャル・キャピタル(社会関係資本)が乏しい(149カ国・地域中101位)
- 単身世帯は日本だけでなく他国でも増えているが、日本は特に、友人や同僚といった家族以外とのつながりが希薄
- 日本の60歳以上単身者は、病気などの場合に友人や近所の人に頼れない^{※3}

ここで強調されているのは、日本社会におけるソーシャル・キャピタルの貧しさだ。この特集の著者陣にも名を連ねるコミュニケーション・ストラテジストの岡本純子氏は、著書『世界一孤独な日本のオジサン』の中で次のように述べている。

「物理的に孤立していること」と「孤独を感じる」とは同一ではない。家族と一緒に暮らしていても孤独にさいなまれる人もいれば、独居であっても友人や近所の付き合いなどを通じて、孤独感を感じない人もいる。独居世帯=孤独、という話ではない。(中略) 孤独に陥らないために重要

なのは、「心から信頼でき、頼ることのできる人たちと、深く、意味のあるつながりや関係性を築いているかどうか」である。そういった意味で、日本は世界一、「孤独」な国民なのだ。^{※4}

確かにその通りだ。俯瞰的に見ればそのような一つ一つの関係性が蓄積されることによって、社会や共同体で見た時にソーシャル・キャピタルが醸成されるともいえるだろう。では果たして個人として、「心から信頼でき、頼ることのできる人たち」との「深く、意味のあるつながりや関係性」は、一体どうすれば築くことができるのだろうか？

「創造的な孤独」の罫

一方で、前向きな「孤独」もある。岡本氏は孤独の英訳として“ロソリネス(loneliness)”と“ソリチュード(solitude)”とを対比し、前者を「誰も頼る人がおらず、『不安で寂しい』という主観的な気持ち」あるいは「絶望的孤独」、後者を「1人の時間を楽しむ」「1人でハッピー」「選択的孤独」と区別した上で、「未婚であるとか、物理的に1人であるとかといったことは一切関係がなく、自分が理想とする人間関係と、現実の人間関係との間に大きな乖離があるかどうかを判断基準だ」としている^{※5}。

古今東西、多くの哲学者・思想家や文学者、芸術家といった人々が「孤独の大切さ・豊かさ」を語ってきた。だが孤高に生きるのは歴史に名の刻まれた偉人ばかりではない。2013年に単行本、2019年に改めて文庫本で発行された都築響一氏の『独居老人スタイル』(筑摩書房)に登場するのは、並外れた個性やライフスタイル、ライフワークを持つがゆえに長年、一人で生きてきた人々だ^{※6}。世間の常識に迎合することなく「孤独ですが、なにか？」と問いかけてくるような独居老人たちの生き様は、文庫本の紹介文の言葉を借りれば「老人の1人暮らし=哀れな晩年」そんな偏見」への痛烈な批判となっている。

またビジネス誌『PRESIDENT』は、2019年3月4日号『毎日が楽しい「孤独」入門』および2019年11月29日号『孤独を100倍楽しむ』と、一年間で2度にわたって「孤独」をテーマに特集を組んでいる。これは個人が抱えるロソリネスを出発点としながら、それをソリチュードへと昇華させる試みといえるだろう。だが、そこには落とし穴もある。

同調圧力の再生産

マジョリティに依拠した社会通念や同調圧力を疑い、個人が自分の中にある幸福や豊かさの「ものさし」を変えることは、ネガティブ

※1: 頭木弘樹訳『絶望名人カフカの人生論』(新潮文庫、2014)より引用

※2: <https://time.com/5248016/tracey-crouch-uk-loneliness-minister/>

※3: 『週聞東洋経済』2018年11月3日号(東洋経済新報社)

※4: 岡本純子『世界一孤独な日本のオジサン』(角川新書、2018)より引用

※5: 『世界が「孤独の弊害」に大騒ぎしているワケ イギリス孤独男性の生きがい創出作

戦とは?』(『東洋経済ONLINE』2018年10月30日)

<https://toyokeizai.net/articles/-/245935>より引用

※6: 都築氏の言葉を借りれば「死ぬまで「気配りペタ」で「空気読まない」変わり者のじいさま・ばあさま」

に見える状況に希望を見出す知恵だ。

だが一方で、悩みや苦しみの原因を個々の主観に帰結させる論理は極端な自己責任論や根性論、精神論に偏る危険も持っている。また常識とされてきたことへの問題提起として生まれた考え方が社会に浸透するにつれ、徐々に「空気」を形成し始め、新たな同調圧力を生み出すことも少なくない。もしも「誰も頼れる人がいなくて、不安で寂しい」と感じている人が「孤独を楽しもう！」という空気に吞まれ、自分を偽って楽しいふりをする一方で、誰にも助けを求められないとしたら？ 行き着く先は、さらに深い孤独ではないだろうか。

孤独から降りるために必要な「弱さの強さ」

ここで筆者は『ボランティア』（岩波新書、1992）や『ボランティア経済の誕生』（実業之日本社、1998）などの著作で知られる金子郁容氏のいう「バルネラビリティ vulnerability（傷つきやすさ、つけこまれやすさ）」、そして『ボランティア経済〜』共著者でもあり編集工学者である松岡正剛氏の「フラジリティ fragility（脆弱さ）」を思い起こす。自発的に情報を出し、自らをバルネラブルな状態に置くことで「窓が開き」、つながりが生まれる。これが「弱さの強さ（power of fragility）」である。

「心から信頼でき、頼ることのできる人たち」との「深く、意味のあるつながりや関係性」を築く方法。孤独から自らを救い出し、生き延びるために必要なこと。それは孤独をなくそうとすることではなく、一人ひとりが自分の孤独を「見つけ」「ひらく」こと、そして「分かち合う」ことなのではないか。

だが、実はそれが一番難しいのかもしれない。岡本氏も前出の著作で、統計上、男性のほうが孤独に命をおびやかされるリスクが高いにもかかわらず、（たとえば「男は強くなければならない」「弱音を吐くのは男らしくない」など）日本社会のジェンダー・バイアスとその内面化によって、孤独であることを認められない・表現できない傾向が強いことを指摘している。日本ばかりでなく、オーストラリアおよびイギリスの事例として紹介されている Men's Shed（男の小屋）も男性たちの拒絶反応を引き出すことのないよう、「孤独」を標榜することはせず、あくまで「モノづくりの場」として運営されている、という。

性別にかかわらず、誰でも孤独を感じることはある。だが、その孤独を抱えきれないにもかかわらず誰とも分かち合えないことが、最も深刻な「孤独」なのではないか。

居場所はないが、孤独ではない？

本報告書は『住宅幸福論』三部作の第3弾であり、都市生活における「孤独」を考察することを目的に、一都三県の未婚単身者と2人以

上の家庭（配偶者、親、子供などとの同居）とを対比させてきた。今回の調査が未婚単身者にフォーカスしているのには理由がある。本総研が2017年に行った調査で、未婚単身者、特に40～50代の男性の幸福度が著しく低かったことだ^{*7}。そしてこれまで紹介してきたような社会背景を鑑みれば、「著しく低い幸福度には、おそらく”孤独”が関わっている」と推測された。

実際、今回の調査結果では未婚単身者（特に男性）の孤独感が高かった。そして印象的だったのは、孤独感の高い人たちに「孤独だが、それでいいと思っている。だが概ね幸福ではないし、精神健康状態も悪い」という傾向が見て取れたことだ^{*8}。また、住んでいる地域とのつながり・関わりは希薄であるにもかかわらず、同時に「地域とのつながりを望んでいない」傾向も明らかになった。これでは日本社会のソーシャル・キャピタルの低さは無理もない。

データを深読み≠邪推する

冒頭に引いたカフカの言葉しかり、いわゆる「ヤマアラシのジレンマ」しかり。人との関わりを「難しい」「煩わしい」「怖い」「リスクが高い」などと感じ、「一人であるほうが気楽」と考える人が増えている可能性はある。あるいは孤独に慣れきっている可能性もある。私たちの社会ですでに、孤独が常態化しつつあるのかもしれない。厳しい自然環境に暮らす人々の先祖が数世代、時には数十世代をかけて文化だけでなく適応してきたように、未来の都市生活者たちはこの状況に適応し、新しい幸福の形を見つけるのかもしれない。

だが現時点で筆者は「孤独を自覚できない、認められない、表現できない」回答者が少なくなかった可能性も考えておきたいのだ。それは推測や深読みですらなく「邪推」や「おせっかい」なのかもしれない。だが、もしも孤独が誰にも知られず「死に至る病」なのだとしたら、おせっかい以外に方法があるだろうか？

「都市の孤独を見つけ、ひらき、分かち合う」ことは、どうすればできるのか。住まいは、そのために何ができるのか。

本報告書122p～137pにある有馬氏の論考で、「家」はハード・ソフト両面とも「孤独」に関連するネガティブな感情との相関は低い、との示唆があった。「家という建物におさまらない住まい」という意味では、やはり地域社会の果たす役割は小さくないと思われる。だが現状、人々は地域社会とのつながりを望んでいない。だとすれば孤独を個人の価値観やライフスタイルに帰するだけではなく、地域社会側にも何らかのアップデートや工夫が必要なのではないか。こうした観点で、地域に働きかけているディベロッパーや集合住宅の事業者、都市計画に関わるデザイナー、都市政策に関わる行政といった専門家もいるだろう。だが地域共同体に関わり、介入していくには様々な問題や難しさが伴う。

残念ながら現時点で、筆者も明確な答えを持っているわけではない。これは未だ結論のない問いかけであって、模索のプロセスだ。だが本稿ではそんな「地域社会のアップデート」の切り口として、「アート」に焦点を当てたい。以下、東京都内のある地域で筆者自身が手がけたアートプロジェクト『Oeshiki Project』を紹介する。プロジェクトを通じて見てきた地域社会のありよう、そこから得られた気づきをここに報告することで、読者諸氏と共に次につながるヒントを見つけることができれば、と願っている。

Oeshiki Projectとは

Oeshiki Projectは豊島区が主催する「東アジア文化都市2019豊島」の一環として、東京都豊島区の雑司が谷エリアを中心に2018～2019年にかけて行われたアートプロジェクトだ。

本プロジェクトではこの土地に江戸時代から伝わる地域行事「御会式(おえしき)」が行われる10月16～18日の3日間、池袋駅周辺の公共空間を舞台に《BEAT》という移動型パフォーマンスを上演した。出演したのは東京で暮らす、トランスナショナルな(国境を越えて生きる)市民パフォーマー約50名。日本・中国から集まったアーティスト・クリエイターのチーム(劇作家、パフォーマンス・アーティスト、音楽プロデューサー、作曲家、編集者、建築家など)が彼ら市民パフォーマーたちと共に「もうひとつのOeshiki」をつくり上げながら街中をパレードし、最後には雑司が谷の地域住民たちが数百年続けてきた御会式に合流するというもの。演劇やアートの持つ非日常的な想像力を借りて、「未来のリハーサル」のような出来事を起こす一種の社会実験だ。

雑司が谷の御会式の「おおらかさ」

雑司が谷は、東京の北の玄関口・池袋駅の南東側に位置する。一日の乗降客数で世界でも3本の指に入るターミナル駅から徒歩10分とは思えない、静かで穏やかな住宅街だ。曲がりくねった路地では塀の上で猫が昼寝をし、緑が風に揺れるざわめきに包まれる。江戸時代から残る欅並木の向こうからは、路面電車のゴトゴトと素朴な響きが聞こえてくる。

御会式はもともと日蓮宗の法会で、宗祖である日蓮聖人の亡くなった10月13日を起点に、関東を中心に広く行われている。「万灯(まんどう)」と呼ばれる大きな灯笼と纏(まとい)を掲げ、団扇太鼓を打ち鳴らしながら練り歩く。雑司が谷の御会式は、大田区の池上本門寺などと並んで「東京三大御会式」に数えられる。



上:『Oeshiki Project ツアーパフォーマンス《BEAT》』メインビジュアル。下:太鼓を運ぶ移動式の台車は七色に輝くLED灯で飾られていた。(撮影:鈴木竜一朗)

だが雑司が谷の御会式の主役は日蓮さんではなく、都電の駅名にもなっている鬼子母神だ。室町時代に近隣から出土した鬼子母神像のために地域住民たちがお堂を建てたのが起源とされ、その境内は行政区分も自治会も校区も越えて、誰も独占せず誰もが受け入れられる共有地、いわばこの地域のアジュールとして大切にされてきた。つまり、もともと別物だった「土地に根ざした民間信仰」と「お寺を中心とした仏教信仰」が渾然一体となっている。これが雑司が谷の御会式最大の個性だ。

そんな由来も関係しているのだろうか。雑司が谷の御会式は、信徒以外の参加者に対してとてもおおらかだ。他の多くの御会式がほぼ檀信徒で占められているのに対して、雑司が谷の場合は約2割。残り8割は地域住民を中心とした「日蓮宗の信徒以外の人たち」なのだ。「御会式で太鼓を叩きたい」という気持ちさえあれば、信徒でなくても、地域外から来た人でも受け入れてくれる。この「おおらかさ」が雑司が谷の御会式の魅力であり、こんな都会のど真ん中で生き残ってきた理由だと私は思う。2015年にはこの地域に特有の「風俗習慣」として、無形民俗文化財にも指定された。

市井の人々の集合知

ところで御会式の太鼓の打ち方(ビート)は、江戸時代の農民や職人といった、市井の人たちの間から自然発生的に生まれてきたようだ。天保の改革、明治維新、第二次世界大戦など、御会式が衰退したり途

※7: 詳しくは『住宅幸福論 Episode.1 住まいの幸福を疑え』(<https://www.homes.co.jp/souken/report/201804/>)を参照のこと。

※8: 56p～121pおよび138p～173p「単身世帯の住生活実態調査」参照のこと。



緑に囲まれ、普段は静かな鬼子母神堂境内が、御会式の晩には熱気と激しい太鼓のビートに包まれる。東池袋の高層ビル群など、現代的な背景との競演もユニークだ。
 (撮影:鈴木竜一朗 ※左上以外のすべて)



絶えたりしたこともある。だがそのたびに、お寺と地域の人たちが復興してきた。戦後は物不足で太鼓がなく、代わりにフライパンを叩いていた。そのうちフライパンのほうが流行ってしまい、お寺が「フライパン禁止令」を出す事態に発展したそう。

雑司が谷の人たちが語り草にしている話がある。戦後の復活以来、休みなく行われてきた御会式だが、昭和天皇がお病気だった昭和63年だけは「自粛」になった。だが我慢できなかった人が、こっそり家の中で太鼓を叩いたところ、ほかの家からも太鼓が聞こえてきた。だんだんと音は広がり、結局みんな集まってきてしまった、という。「生きた伝統」である、雑司が谷の御会式を象徴するエピソードだ。

農村的かつ都会的な地域コミュニティ

私は2018年夏、Oeshiki Projectを立ち上げるため、この土地で暮らし始めた。住み始めてすぐ雑司が谷の「農村的かつ都会的」ともい

うべき共同体のありように驚かされた。山の手線の内側とは思えないような濃厚な地域コミュニティが生きている一方で閉鎖的ではなく、私のような「よそ者」もさわやかに受け入れる気風がある。

それを実感した体験として、年に一度の「すすき刈り」がある。雑司が谷に江戸時代から伝わる郷土玩具「すすきみみずく」はすすきの穂でつくられたみみずくのおもちゃで、御会式の縁日でも売られている。2010年に最後の職人さんが廃業し、文化が絶えかけたことをきっかけに〈すすきみみずく保存会〉という地域住民の組織が発足し、地元小学校の児童や希望者につくり方を教えている。そのために毎年、数万本のすすきが必要なのだ。私は雑司が谷に引越す直前、まだ誰も知り合いのいない状態で、このすすき刈りに参加してみた。

土曜の朝6時30分、集合場所である池袋駅に向かうと、すでに数十名ものボランティアの人々が集まっていた。きっぷと朝食代の500円を渡され、特急レッドアロー号で秩父に向かう。2時間かけて現地に着くと軍手やハサミが用意されていて、初めて出会う地域の人たちに



すすき刈りに参加するボランティアの人々は年齢も職業も様々。必ずしも雑司が谷に住んでいる人ばかりでなく、地域外から仕事で通っている人も。参加者の多くは御会式の担い手も兼ねている。



混じり、残暑厳しい9月の日差しの下ひたすらすすきを刈りまくった。「このすすきはだめですよね?」「そのすすきいいね!」といった会話を通じて、だんだんと距離が縮まってくる。お昼

にはお弁当が支給され、山の上に集まって食べた。中心になっているのは御会式コミュニティの人々なのだが、初参加の夫婦がいたり、児童のすすきみみずく作りに関わる小学校の先生たち、市役所の職員たちが休日出動していたりもする。

中でも主戦力として大活躍していたのが、雑司が谷でホームレス支援などを行う福祉施設の人たちだ。10年ほど前に「地域に支えていただいているから」というトップの考えから、20~30代の職員たちが地域活動に参加するようになったという。運転や警備など裏方や力仕事を率先して担うと同時に、人懐こいキャラクターで地域の人たちから(少々荒っぽいほど)かわいがられている。彼らは雑司が谷に住んでいるわけではないが、地域コミュニティに欠かせない一員になっている。

私はこのすすき刈りが、「農村的共同体のplay back(再生・再現)」だと感じた。昔の農村では、地域みんなで稲の刈り入れをしたり、屋根の茅葺きをしたという。だが現代の都市には水田もないし、サラリーマンも多い。一緒に苦勞し助け合う場面をつくるのが、共同体の維持に一役買っているのだ。しかしすすきの場合、刈らなければ食べていけないという話ではない。にもかかわらず平日働いている人たちが週末に、特急で2時間かけてすすきを刈りに行こう! というボランティア活動にこれだけ人が集まるのは、雑司が谷の農村的共同体の底力だと思った。

一方で特急の席が決まっていて、道具も貸してくれるため、初めてでも参加しやすい。朝食代やお弁当も出る。誰にでも公平に居場所と役割が用意されている点は、人口流入が激しく、昼間人口と夜間人口の差も大きい池袋で、コミュニティへのさまざまな関わりを許容する「都会的共同体の知恵」と言えよう。

共同体の「隙」が寛容さを生む

御会式の準備にも、これと同じ知恵とバランス感覚が生きている。万灯を飾る紙の花づくりでは、婦人会の女性たちのテキパキとした仕事ぶり、明確な役割分担、丁寧な指導に驚いた。初参加者にはケガ予防で指にバンドエイドまで貼ってくれ、昼食も用意してくれる。

その間、男性たちは保管のための小屋づくり、万灯の組み立てなど、力仕事を担当する。聞けば、同じ中学の先輩後輩だったり、小さいときから一緒に太鼓を叩いていた仲だったりする。御会式を立ち上げ

る共同作業が、地域の人たちの体に染み込んでいることを感じた。

その一方で地元のお母さんが「一年に1度しかやらないから、こどうするか忘れちゃった」と言い出したり「次はもっとこうした方がいいわね」「違うのよ、去年もそう言っていたのよ」と和やかな反省会が始まったりして、初参加者としては居心地が良かった。

雑司が谷の御会式があまり練習しないことにも、最初は驚いた。もちろん生まれる前から太鼓の音を聞いて育っているようなコアな人たちは、練習しなくても物凄く上手だ。子どもたちの指導や練習は、講社によっては行われている。だが地域外からの参加者を含め、多くの人は本番前に練習する機会がほぼ無い(私も初参加の本番で初めて太鼓を持った)。御会式の太鼓は「先太鼓」「後太鼓」という2つの異なるビートのアンサンブルで、即興的に役割やスピードや曲が変わっていくので、なかなか難しいにもかかわらず、だ。

すると何が起こるか。人が増えれば増えるほど、音がバラバラになる。「うちは太鼓が揃わないから」とぼやく講元(講社のリーダー)もいるが、それでも無理に練習しない。会社勤めの人が多かったり、地域外のメンバーもいるとなれば、練習のために集まるのも大変だろう。負担が大きくなれば、参加できる人は地元で自営業をしているような、ごく一部の人だけになってしまうかもしれない。

その代わり御会式の当日には、上手い人がリードしたり、わからない人には近くに来て一緒に叩いてくれたり、間違えても許される(肩身が狭くない)寛容な空気がある。これが雑司が谷の御会式の居心地の良さにつながっていると私は思う。

地域の文化や共同体を守ることを維持していくことを考えるとき、こうした雑司が谷の共同体の振る舞いには、学ぶべきところが大いにある。御会式の太鼓はそもそも、権威ある人がつくったものではない。人々の間から自然と生まれ、磨かれ、いつの間にか出来上がっ



毎年、御会式の一週間ほど前に行われる万灯の組み立て(上)と、万灯につける紙の花づくり(下)。



国籍もルーツも多様な人々が行き交う池袋駅北西口。外国籍の児童が多く通う池袋小学校では多言語対応も進む。



が、先述してきた通り風通しの良いコミュニティでもある。その「長く住みたくなる・住み続けられる環境」が彼らにも開かれたら、未来は変わっていくかもしれないと考えた。

だが、駅を挟んですぐ向こう側に住むこうした人々は、あまり御会式に参加していないし、そもそも御会式を知らない。巨大なターミナル駅に阻まれて生活圏が分断されているという理由も大きい。地域住民に尋ねたところ「気が合って、日本語がしゃべれれば、大歓迎」との答え。言語の壁があると独特のしきたりや安全面の説明ができない、というのがその理由だ。

孤独の連鎖と不寛容社会

た「集合知」だ。未だに講社ごとに微妙に叩き方が違って、みんな「うちが一番」だと思っている。”正解がない”とか”完全には揃わない”といった「隙がある」こと——それこそ金子氏のいう「パルネラビリティ」であり、共同体の窓を開く鍵なのではないだろうか。

トランスナショナルな東京市民たち

豊島区は面積13平方キロに約29万人が暮らす、日本一の高密度都市だ。在住外国人が多いことも特徴で、総人口の約1割が外国籍。特に、雑司が谷から見て池袋駅のちょうど反対側(北西側)に当たる西口エリアには、中華系コミュニティを中心に海外にルーツを持つ人々が多く集まる。この地区の小学校では全児童の約3割が外国籍の子どもたちで、日本語クラスや複数言語対応といった取り組みも進んでいる。

2014年、豊島区は大きな課題に直面した。日本創生会議が発表した「消滅可能性都市」。2040年までに消滅が予測される全国896の自治体のひとつに、東京都23区から唯一、豊島区が選ばれてしまったのだ。「消滅可能性都市」とは「少子化や人口移動などが原因で将来消滅する可能性がある自治体」のこと。豊島区の総人口は増え続けていたにもかかわらず、その多くが20代の単身者で、就職や結婚を機に区外に転出していた。そして「豊島区に住み続けている人」が減り続けていたのだ。以来、豊島区は課題先進都市として、子育て支援や空き家対策、芸術文化に力を入れたまちづくり等、さまざまな改革に取り組んできた。流出の激しい若年層には外国籍の区民も多く、彼らが「長く住みたい」と思うようなまちにしていくことも重要だ。

たとえば雑司が谷は「長く住み続けている人たち」が多いエリアだ

LIFULL HOME'S総研が2017年に発表した報告書『寛容社会』は在留外国人に対する日本社会の「寛容度」に冠する調査だった。そのなかで「日本人が外国人に守ってほしいこと」の第1位は「集団で騒がない」、第3位が「夜遅くに大きな音を出さない」だった。ちなみに御会式は集団で練り歩き、夜中まで太鼓を打ち鳴らすので、どちらの要素も含む。もちろん「うるさい」といった苦情が出ないことはないが、地域で長く続いてきた行事であることや、警察や消防と密に連携していることもあり、決して多くはない。

この調査でさらに興味深いのは、異国から来た隣人に対して寛容度が低い日本人たち(回答者)には「自分が地域社会の一員だと認められている実感が低い」という傾向があったことだ。自分は地域社会から疎外されている、と感じている人ほど、他者を疎外する。都市の孤独が連鎖し、都市を不寛容にしているのだ。

Oeshiki Projectでは、こうした「都市の不寛容」に挑戦したいと思った。雑司が谷の「農村的かつ都会的共同体」の力に光を当て、さらに拡張した未来の地域共同体の姿をリハーサルすること。そのために「最も近くて遠い隣人」すなわち池袋駅の北西側に暮らす多様なルーツを持つ人々と当日来場した観客たちが「もうひとつのOeshiki」を自分たちの力で立ち上げ、池袋駅を越え公共空間を旅して、初めて御会式と出会う《BEAT》というツアーパフォーマンスを企画した。

Oeshikiが御会式に出会う

雑司が谷の各講社の人数は、それぞれ数十人～200人ほど。Oeshikiにも100本以上の太鼓が必要だと考えた。《BEAT》では約半年間の

《BEAT》ではトランスナショナルな市民パフォーマーたちとアーティストとがワークショップを重ねて作品をつくり上げた。(撮影：鈴木竜一朗)

リサーチを通じて出会った中国系の人たちをはじめ、池袋を中心としたトランスナショナルな市民パフォーマーたち約50名が出演した。これに、当日来場した観客が加わって100~150名になる。

パフォーマーたちには、別の国から来て日本で学んだり働いたりしている人、国籍と違う国で生まれ育った人、両親のルーツと自分の国籍が違う人、生きている途中で国籍が変わった人もいる。彼らをひとつの言葉で束ねることがためらわれるが、当事者たちと議論を重ね「国境を越えて生きる東京市民」という意味で「トランスナショナルな市民パフォーマーたち」と呼ぶことにした。

彼らと共に「もうひとつのOeshiki」を立ち上げたいと考えた理由は2つ。1つ目は「自分たちでやってみる」ことを通じて御会式の華やかさだけでなく、地域共同体の歩んできた「歴史」や「プロセス」を感じてほしかったから。

2つ目は、雑司が谷の人々／パフォーマーと観客が伝統文化を教える／教わるという関係ではなく、異なる文化を持った者同士として対等に会ってほしかったから。昨今、各地で盆踊りやお神輿などに地域外の人や外国人（住民でも旅行者でも）を受け入れていこうという動きは各地で見られ、一種のブームにもなっている。互いが誰だか知らず、お祭りの背景もさほど知らずにひとつの輪になって交わる祝祭感も良いが、結局は「よそ者」で終わってしまい、余計に疎外感を感じるだけではないかと危惧した。だから《BEAT》では太鼓の曲も衣装も万灯も、試行錯誤しながら「御会式とは違う、自分たち（オリジナル）のOeshiki」をつくってみることにした。

そのようにして生まれたトランスナショナルなOeshikiの太鼓は、未来の御会式の音かもしれない。言葉も文化も（当時してみれば外国くらい）違う人たちが集まった、世界一の過密都市・江戸で御会式が生まれた頃の、原初の音かもしれない。その音を聞いてみたい、そして誰よりも雑司が谷の人々の耳に届けたいと思った。

ツアーパフォーマンス《BEAT》

上演は、街角で待ち合わせたパフォーマーと観客の、小さな太鼓のセッションから始まった。国籍も言語も体に染み込んだビートも様々なながらこの数ヶ月「御会式」という文化を学んできた人たちと、御会式についてほとんど何も知らない（多くは日本の）観客たち。初対面の二人は「きょうのりんじん」として出会い、一緒に太鼓の練習をしながら次の会場へ向かう。賑やかな池袋の街角のあちらこちらから、徐々に太鼓の音が聞こえ始める（昭和最後の御会式のplay backだ）。

やがて、日本語学校や中華系カラオケボックスなど池袋エリアに点在する5つのシークレット会場にパフォーマーと観客、数十人が集まる。ここではパフォーマーのファシリテーションによる、自身のアイデンティティを巡る対話と太鼓セッションが行われた。



その後、それぞれ異なるビートを奏でる5つのグループは「きょうのりんじん」同士で対話を続けながら、池袋駅前の公園へと移動。ここで初めて全員が集合し、100本以上の太鼓のセッションが池袋のまちに響き渡った。そのまま、アニメイトや都内最大（当時）のユニクロが並ぶ目抜き通りをパレード。通行人からのクレームや妨害を覚悟していたが、予想を裏切り問題は起こらず、スマートフォンで撮影する人、手を振る人、太鼓に合わせて踊り出す人など、行列は祝祭的なムードに包まれた。

そして最後は、雑司が谷の御会式に合流。100名以上のパレードが池袋駅前の混雑を抜けて、受け入れ予定の講社がやってくるタイミングにぴったり合わせて到着する。通常運転する都電の踏切や過密状態の観衆の合間を縫って、進み続ける行列に一気に合流するため、絶対安全を期してお寺や地域の人々と半年以上の協議を重ねた。さらに地域の方々の粋な計らいで、Oeshikiの万灯も急遽、御会式に混ざって歩くことになった（万灯は各講社にとって最も重要なシンボルなので、異例のことだ）。地元の人々と共に太鼓を打ち鳴らし、鬼子母神にお参りをしてゴール。池袋駅の北西から南東へ、徒歩20分の距離を約3時間半かけての旅を終えた。

地域共同体の「開いてゆく力」

Oeshiki Projectは地域共同体の持つ潜在的な寛容性・許容力を拡張し、「もっとも近くて遠い隣人」である新住民を招き入れる試みだった。

プロジェクト終了後、参加したパフォーマーたちからは「日本の社会で、初めて受け入れられたと感じた」「来年も御会式に参加したい」といった感想が寄せられた。一方、雑司が谷の地域住民からも「実現できるか心配だったが、やってみたら楽しめた。来年以降もまた受け入れたい」「最初は反対していたが、終わってみて、アンチだった自分を恥じた。本当にやってよかった」といった声が聞かれた。





池袋駅周辺～雑司が谷にかけて公共空間を舞台に上演されたツアーパフォーマンス《BEAT》。街中で観客と市民パーフォーマーとが「きょうのりんじん」として待ち合わせ、共に歩きながら「もうひとつのOeshiki」を立ち上げ、最後に雑司が谷の御会式に合流した。（撮影：鈴木竜一朗）

御会式の太鼓が結ぶ「順縁」と「逆縁」は、公共空間における「音楽」と「騒音」に対比できるのではないが、という仮説のもと池袋の街中を太鼓を叩きながらリサーチした。(左のみ撮影:鈴木竜一朗)



Oeshiki Projectおよび《BEAT》は、一定の成功を取めたと言ってもよいと思う。それは雑司が谷の地域共同体が潜在的に持つ知恵と寛容さの発露であり、その「眠っていた実力」がアートを触媒として、最大限に引き出された結果に違いない。SPAC- 静岡県舞台芸術センター芸術総監督で東アジア文化都市2019豊島舞台芸術部門総合ディレクターも務めた演出家の宮城聡氏は「素晴らしい知恵というものは、“開いてゆく”力を内蔵している。今回のOeshiki Projectはそれを実感させてくれた」と評した。

実は御会式の側も、高齢化や万灯の担ぎ手不足、講社の人数現象といった課題に直面している。現状はまだ深刻ではないものの、近い将来、現在の規模を維持できなくなる可能性は高い。もっと人を増やしたい、新しい人を受け入れなければと思いつつも、言語の壁やしきたりといった障壁や、心理的には抵抗感や軋轢がある。その点で、地域共同体内部の人々自身が自分たちの「開いてゆく力」を目の当たりにし、「やってみたら、できた。楽しかった」「また受け入れたい」という前向きな気持ちを得た、ということが一番の成果だったかもしれない。

都市を打ち鳴らす、悲しみの群れ

Oeshikiを立ち上げるにあたり、大切にしたいコンセプトがある。それは仏教用語である「同悲」の心だ。「同悲」には他者の悲しみに向けられた同情や憐れみとは違い、自分の悲しみを通して他人の悲しみに共感する、共に悲しむ、といった意味合いがある。本来、祖師(日蓮聖人)の死を悼み、弔うための行列だった御会式。現在でこそ賑やかなお祭り騒ぎに見えるが、その核にあるのは同じ悲しみを分かち合い、一緒に歩く心だという。

それを聞いて、太鼓を打ち鳴らす数千人もの御会式の行列が、私には「悲しみの群れ」に見えた。東京のような現代の都市において「地域」とは、血縁でも、気が合うから一緒にいるわけでもない、たまたま隣り合った人々の共同体だ。いま私たちが直面しているのは「隣の人々の悲しみがわからない」という悲しみではないだろうか。《BEAT》では、



今日初めて出会った、互いの背景も言語も異なる観客と市民パフォーマーたち。あいにくの雨の中3時間半かけ鬼子母神まで歩く旅は、雑司が谷の地域共同体と「最も近くて遠い隣人」とが出会う旅でもあった。(撮影:鈴木竜一朗)

わかり合えない悲しみを分かち合いながら一緒に歩くこと、たまたま隣り合った人と一緒に生きていくことを、ツアーパフォーマンスという形に込めた。対話のシーンでは、パフォーマーたちに自身のアイデンティティを巡るエピソードと共に「同悲」について話してもらった。

不寛容な公共空間を超えて

もうひとつ、興味深かったのは仏教の「順縁・逆縁」という概念だ。御会式の太鼓には「報せる」「ご縁を結ぶ」という意味がある。もとは、仏の教えを学ぶ集会の開催を知らせるために太鼓を打ったり、読経をしながら太鼓を打つ行為だった。やがて「その音を聴くだけでお経を読むのと同じ意味がある」、「偶然その音を耳にした人まで仏縁が結ばれる」といった考えが生まれた。ただし、その「ご縁」には「順縁」と「逆縁」がある。順縁のほうは「(対象を)受け入れる心」、逆縁のほうは「抗う、反発する心」。これは、公共空間における「音楽」と「騒音」の違いとも重なるのではない。

最近では「子どもの声がうるさい」という理由で反対され、保育園建設が頓挫する、というニュースも聞く。不寛容な都市空間では少数派が攻撃されやすい。一方、シェアハウスなど共同生活を好む人も増えている。隣家の生活音は知っている人なら安心感につながるが、顔の見えない関係だと「騒音」になってしまう。

できることなら順縁を増やしたいと思うのが人の心だ。だが一方で、御会式を執り行う法明寺ご住職・近江正典氏は「順縁でも逆縁でも、どちらも縁」と言う。その話を聞いて、確実に安全な方法だけでなく、リスクも含めて公共空間の寛容さに挑戦したいと考えた。

たとえば公共空間でパレードを行う場合、警察の許可が必要だ。雑司が谷の御会式も、明治通りと目白通りを半分封鎖して練り歩く。《BEAT》も最大人数でパレードをする場面では警察の許可を得ると共に近隣への事前説明を行ったが、それ以外の場面、たとえば昭和最後の御会式を再現したシーンでは、2~3人×約50組があちこちの街角に散らばって太鼓を叩くことで、「許可の要らない範囲で、どこまで公共空間に受け入れてもらえるのか(順縁を増やせるのか)」にチャレンジした。



どこで、どんなふうにも太鼓を叩けば、叩くほうも聴くほうもお互い楽しめるのか。なかなかハードルの高い挑戦ではあるが、団扇太鼓を片手に、夜な夜な池袋のまちを歩き回ってリサーチした。地域のお店などには事前に挨拶回りも行ったおかげか当日は目立ったトラブルもなく上演できた。

だがここで繰り返しておきたいのは「順縁であれ逆縁であれ縁は縁」という考え方だ。逆縁、たとえば「迷惑」を恐れるあまり人々は縁を断ち切り、孤独を加速させているのではないか。クレームや苦情を回避したいのは当然だが（Oeshiki Projectも行政主催の事業だったため非常に慎重にならざるを得なかった）、まずは「縁を結ぶ」ことを恐れず、時間と手間をかけ「(地域内の)逆縁を順縁に変えていく」技術や知見を、領域をまたいで共有していく必要があるように思う。

家族の風景

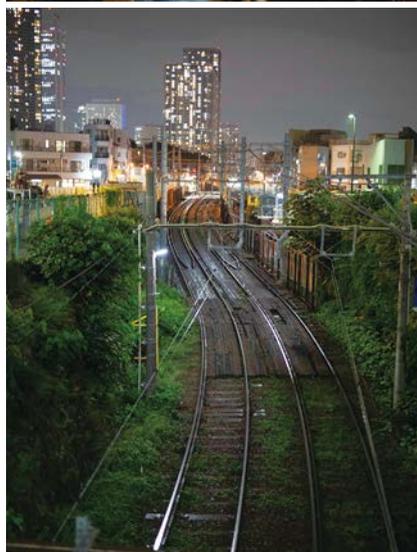
ここまで、雑司が谷の「農村的かつ都会的」な地域共同体のありよう、またOeshiki Projectが行った、都市の孤独と不寛容社会についての問題提起を見てきた。最後にプロジェクトの過程で筆者が出会った、忘れられない風景を記しておきたいと思う。

その日、私は都電の線路を見下ろすマンションにいた。手には、一



輪の白い百合。玄関を上がってすぐの台所では、婦人会のOさんが煮物を温めている。6畳ほどのリビング・ダイニングを抜けると、寝室のベッド脇に祭壇がつくられていた。線香を手向け、遺影の前に百合を置く。その晩の列席者は血の繋がった家族・親戚が3人、私を含め家族以外が6人。

前々月、プロジェクトを共に進めていた雑司が谷のKさんのお父さんが亡くなった。長年にわたり御会式を取り仕切ってきた鳶職人で、地域の若い衆に恐れられると同時に慕わ



東京に残る唯一の都電、都電荒川線。これからの地域共同体は、孤独の群れの居場所になれるだろうか。(撮影：鈴木竜一朗)

れていた。早くに妻を亡くし、晩年は介護施設で暮らしていたという。私は残念ながら直接お会いする機会にはなかったが、お通夜に参列させてもらった。

ある日、Kさんから「ピザパーティをするから来てほしい」と連絡があった。お父さんの晩年の好物がピザだったので、四十九日の前に、みんなでピザを食べて送り出したいという。故人と血縁も面識もない私が参列してよいか迷ったが、声をかけてもらったことが有り難く、お招きを受けることにした。

Kさんの叔母さん(90歳を超えて足腰が弱ってはいるが達者で、叱られたら怖そうだ)とその息子さんが二人で暮らすマンション。部屋いっぱいに並べられた卓袱台の周りにはKさん、町会長、前の町会長、婦人会のOさん、同じ講社からは役員のAさんと、雑司が谷に住んではいないが地域にあるホームレス支援施設の職員でKさんに可愛がられているYさん、そして私が肩を寄せ合って座った。全員が食卓を囲むと、息子のKさんが宅配ピザを霊前に供えた。ピザと、Oさんが山ほど作ってきた煮物とビールで献杯をした。30代から90代まで、ほとんど血のつながらない男女が食卓を囲んだ風景は、まるで家族か親戚のようだった。

核家族化が進んだ都心で、職場が同じだからでも、趣味が合うからでも、価値観が似ているからでもなく、「たまたま近所に住んでいる」以外はあらゆる点で異なる人々が家族のように食卓を囲み、死を弔う。私は御会式から「同悲」という言葉を学び、Kさんや雑司が谷の人々からその心を教えてもらったように思う。

私はこれが「都市の孤独を見つけ、ひらき、分かち合う」風景のひとつだと感じた。このような人と人との支え合いは都市の孤独と共にありながら、温かい。見つけることは見つけられることで、支えることは支えられることなのだ。私たちは「互いの孤独をひとりしにしない」ために、何ができるだろうか。

ずいぶん遠くまで歩きました。

五時間ほど、ひとりで。

それでも孤独さが足りない。

まったく人通りのない谷間なのですが、

それでもさびしさが足りない。—— フランツ・カフカ

PROFILE

石神夏希(いしがみ・なつき):1999年よりペビン結構設計を中心に劇作家として活動。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。近年は横浜を拠点に国内各地や海外に滞在し、横浜・メルボルン・マニラで創作・上演した『ギブ・ミー・チョコレート!』(2015-2017)をはじめ都市やコミュニティを素材にサイトスペシフィックな演劇やアートプロジェクトを手がける。また『Sensuous City[官能都市]』(HOME'S総研,2015)をはじめ社会や都市に関するリサーチ・企画、NPO法人『場所と物語』理事長、遊休不動産を活用したクリエイティブ拠点『The CAVE』の立ち上げなど、空間や都市に関するさまざまなプロジェクトに携わる。